

338

122



始



338-122



「アルト・ハイデルベルヒ」



此「アルト・ハイデルベルヒ」が、初めて獨逸の首都伯林の伯林座の舞臺にのぼつたのは、明治三十四年十一月二十二日の夜の事であつた。其前にもいくつかの作はあつたが、當時尙殆んど無名の作家だつたウキルヘルム・マイエル・フェルスタアは、たゞ一夜にして、獨逸に於ける最も有名な作家の一人となつた。而して彼の此作は伯林に於てばかりでは無い、あらゆる獨逸の聯邦に於てばかりではない、苟くも獨逸語の話さるゝ國々に於ては、最も好評な作の一つとなつた。而して其後幾年ならず、羅甸

語國にも、アングロ・サクソンの國にも、多くの翻譯が出來て、そこでも多數の觀客を引つけた。聞くところに據ると、二百日、三百日の長興行は珍らしい方ではなかつたといふ。最も成功した時には、一息に五百日も打通した事があるといふ。而してその勢ひは書卸し後十三年もたつた今日に至つても、衰へては居ない。單に讀物としての脚本も、出版後わづかに六年にして百版をかさね、十萬餘部を賣盡し、今日ではもう其數倍の發行高になつて居るといふ。

自分の試みた此日本語の翻譯は、キャテリース・ポインヤンの英譯を主とし、明治三十六年に英國の名優ジョーヂ・アレキサンダアが、自分の座のセント・ジエームスで此作を出した時、特に作つたリュウドルフ・ブライクマンの英譯本をも參酌した。併し兩本の譯文に、時々違つた節もあり、双方の譯語に妥當を缺くらしく見える箇所も發見されたので、左様いふ所は一々原作と照し合せて、英譯の誤謬を正した。但歲將に暮れんとし、發行書肆と印刷所とから、しきりに催促が來るので、十分に原作と對照す

る時を獲なかつたのは、頗る遺憾とする所であるが、大體に於ては、少くとも既往に現はれたどの英譯よりも、餘程原作に近いものと自信して居る。是について自分は、巖谷小波、金子馬治、西彦太郎、泉谷氏一、及び泉谷エリザ夫人等の諸氏に對して、深く感謝の意を致さなければならぬ。

文藝協會が第五回公演として、此脚本を選択した事については、それ／＼の理由が有る事と思ふが、それは局外者たる自分の知る筈の事ではなく、又知らうとする必要も

ない事である。たゞ何故其會長坪内博士が、自分に此翻譯を委嘱したかといふ事については、多分余が滯英中此劇について多少の智識を得て居た事を知つて居られるためであらうと思ふ。明治三十六年の初冬の事であつた。自分が日々見學に出かけて居た倫敦劇術學校では、卒業試演の一として、此脚本を選び、其指導をば、三年前に此劇を演出して名聲を高めたジョーデ・アレキサンダアジョーデ・アレキサンダア（今のサア・ジョーデ）に托した。アレキサンダアの教授ぶりは極めて熱心なもので、自分の持ち座を開放して、そ

これを臨時の稽古舞臺とした。而してその折々には、英國劇場の耆宿サア・バンククロフト夫妻も來る事がある、世界女優の明星たるエレン・テリ嬢も來る事がある。彼等はジョーヂと共に、生徒たちの演技法に批評を加へて彼等を鞭撻した。倫敦劇術學校卒業後いくばくもなく、ジョウの“Philanderer”の女主人公を、リ、ア、マツカアシの代役としてつとめ、一夜にして今日の名聲を獲得したメリ・バアトンの如きは、實に此時ケティイに扮して、諸名優の鞭撻を受けたのが、自分の藝術の眼を開く

基礎となつたのだと云つて居た。自分は絶えず此時の稽古を見て居たが、併し獨逸澳太利諸地方の歴遊中には、不幸にして一度も此劇を見る事が出来なかつた。て、此劇の翻譯者たり、舞臺監督たるには決して適當ではないと固辭したが、寛宏な坪内博士の慫慂には敵しかねて、またとう／＼重ねて文藝協會に累する事となつてしまつた。たゞ幸ひなことには、獨逸の各地方ならびに英國等に於て此劇が演ぜられた時の舞臺面の寫眞、さては其當時の記録批評などが、意外に多く蒐まつて居るのと、日

本にも獨逸留學中に此劇を見て居る人々がなか／＼多いのとて、登場上の便宜は存外尠くない。尙此外にサア・ジヨードや、其他獨英の俳優評劇家等に對している／＼尋ねてやつた事もあり、これらの返事は遅くも有樂座に於ける上場前に、手にし得らるゝ期望がある。かゝる内外の援助を湊合して努力したら、庶幾くば太しい失態のない演出が出来さうに考へられる。

英の評劇家ジェー・テー・グライン、かつて此劇を評してかう云つた。われ／＼は此戯曲に對する事、さながら田

名評也

舎を漫步さして路傍から摘み取つた可憐の花に對する如くしなければならぬ。公園や花園には、もつと崇美な、もつと馥郁たる、もつと絢爛な花がある。併し此野の花の新鮮な匂ひと、淡素な色とは、能くわれ／＼の心を恍惚たらしめる』と。此泰西の野の花が、日本の劇壇に移し植えられた時、日本の觀劇家に同じ感じを與へる事が出来るか、如何か、文藝協會の俳優諸氏と共に、兎も角も大に努力して見やうと思ふ。

大正二年元旦

日本橋三越呉服店に於て
駿河町人

思ひ出 (Alt-Heidelbeyg)

「ウキルヘルム・マイエル・フェルスタア作
松 居 松 葉 譯」

登場人物

- カアル・ハインリツヒ (ザクセン・カアルスブルヒ公國の公子)
- フオン・ハウク (國務卿)
- フオン・バツサルゲ (侍従長)
- フオン・メツチング (侍従男爵)
- フオン・ブライテンバツハ (侍従)
- ユツトナア 哲學博士)
- ルツツ (式部官)
- 伯爵デトレイフ・フオン・アステルベルヒ (ハイデルベルヒ大學々生)
- カアル・ビルツ (全上)
- クルト・エンゲルプレヒト (全上)
- フオン・ウエイデル (全上)
- リュウダア (酒屋の亭主)
- フラウ・リュウダア (其妻)
- フラウ・デルフェル (其叔母)
- ケラアマン (學生小使)
- ケテイイ (リュウダアが姪)
- シエーラアマン (舍人)
- グランツ (全上)
- ロイタア (全上)

其他侍従、士官、學生、音樂手、召仕等

思ひ出 (Alt-Heidelberg)

(登場人物)

- | | |
|-----------------------------------|--------------|
| カアル・ハインリツヒ (ザクセン・カアルスブルヒ公國の公子) | ハルリー・ワルデン |
| フオン・ハウク (國務卿) | アルツィル・ウエーデル |
| フオン・バツサルゲ (侍従長) | レオ・コンナルト |
| フオン・メツチング (侍従男爵) | リヒヤルト・ダウベル |
| フオン・ブライテンバツハ (侍従) | ヤツクエツス・アムヒ |
| ユツトナア (哲學博士) | ウキルヘルム・ローラント |
| ルツツ (式部官) | コンラート・ラレマント |
| 伯爵デトレイフ・フオン・アステルベルヒ (ハイデルベルヒ大學々生) | エルンスト・ピットシャウ |
| カアル・ビルツ (全上) | ハンス・ジーベルト |
| クルト・エンゲルプレヒト (全上) | フリッツ・コツホ |
| フオン・ウエイデル (全上) | アルベルト・シユントレル |
| リュウダア (酒屋の亭主) | フランツ・シュラゲル |
| フラウ・リュウダア (其妻) | ケテイイ・ハツベエ |
| フラウ・デルフェル (其叔母) | ケラウ・ウエンク |
| ケラアマン (學生小使) | ヒューゴ・ハツベエ |
| ケテイイ (リュウダアが姪) | レオニー・タリアン |
| シエーラアマン (舍人) | エミール・ホニ |
| グランツ (全上) | グスタフ・フレイ |
| ロイタア (全上) | フランツ・ウヅツケ |

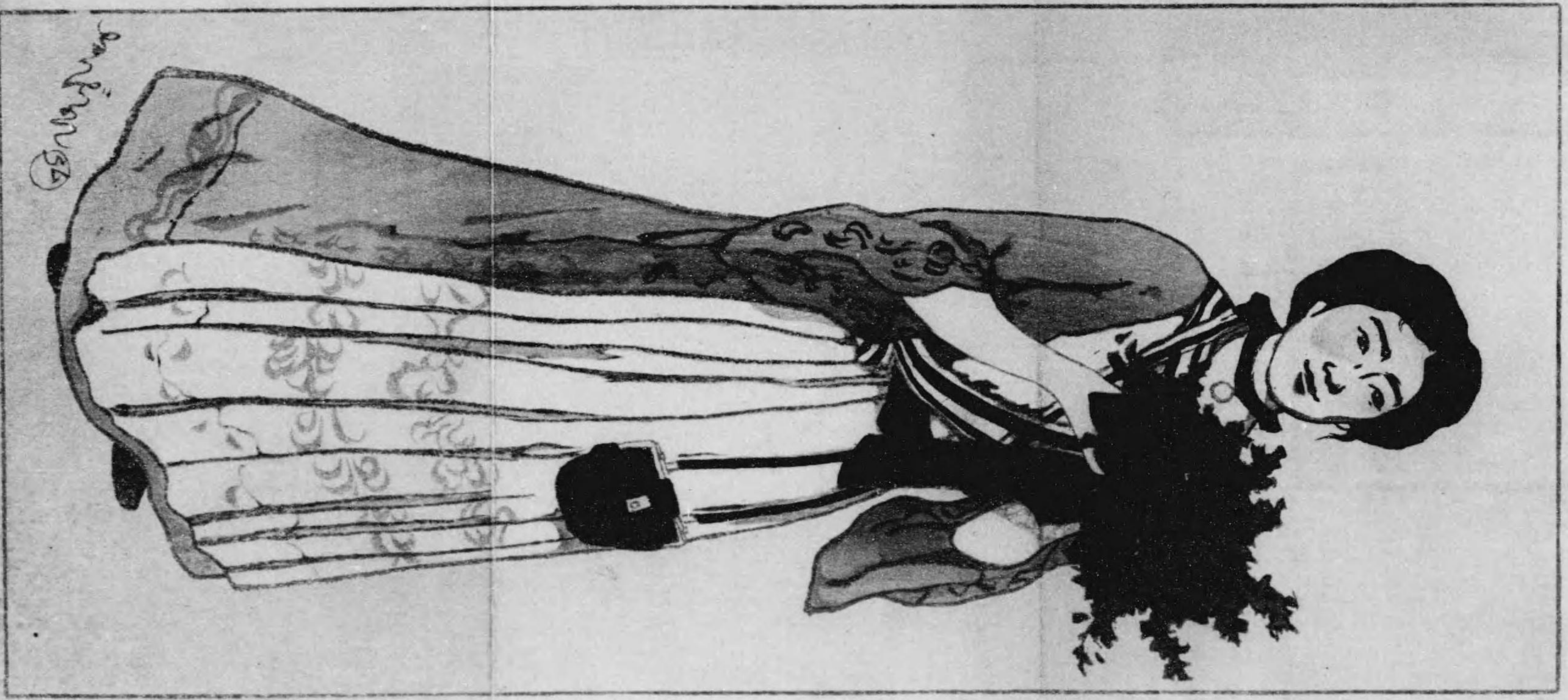
其他學生、樂手等數十名

明治三十三年關西府林
伯林座初興行登場俳優

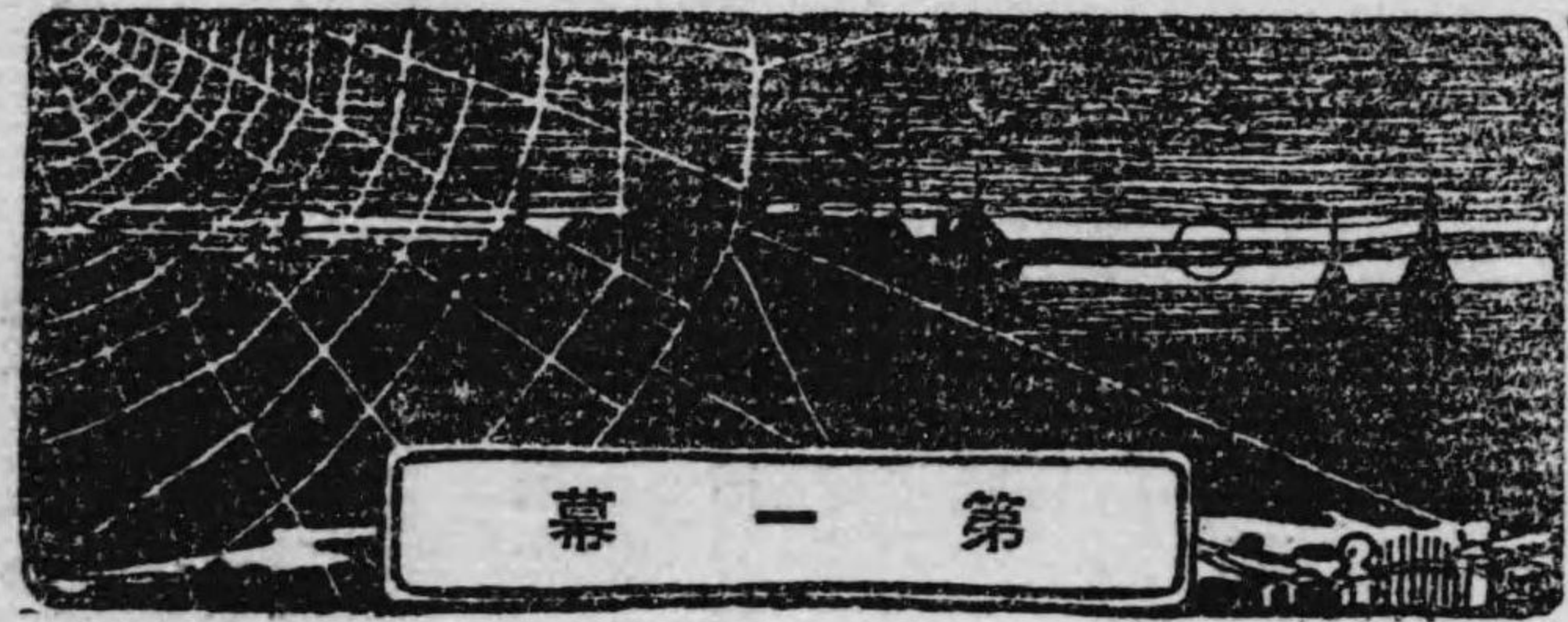
大正二年二月文藝協會
第五回公演登場俳優

- | | | | | | | | | | |
|----|----|----|----|----|----|----|----|----|----|
| 河野 | 小松 | 倉部 | 廣西 | 戸小 | 佐森 | 加東 | 戸西 | 森佐 | 土肥 |
| 野川 | 野井 | 橋郷 | 田原 | 田串 | 々英 | 藤儀 | 田原 | 英々 | 肥 |
| 仲益 | 唯須 | 仙 | 道演 | 勝藤 | 敏木 | 次精 | 季猿 | 勝次 | 木 |
| 介治 | 郎子 | 郎子 | 子彦 | 仁樹 | 積郎 | 一治 | 仁彦 | 積元 | |





中々アゲ
がある。



思ひ出 (Alt-Heidelberg)

カアルスブルグ大公が内廷の溜りの間。しばく古王宮などに見らるゝ、帷をかけたる幽鬱なる室。幾群の騎兵士官小隊にてさゝやき合ふ。全體の光景は、幽鬱と陰沈の印象を與ふ。

第一景

日はいつまでも暮れさ
らもない。だれかね、奥に居るのは。

フォン・ライテンブルヒ フォン・ハウク閣下也。



メツチンク 今晚は何かあるのかね。え、何にもありはしまい。有る例はない、
年中同じ事さ。わしはやり切れない程くさくさしてしまつた。
プライテンブルヒ(氣拔した様子) 全くだく。(向ふを見て) やつ、閣下だ!

第二景

國務卿 (中央より入来る)。

メツチンク(敬禮す) 閣下!

プライテンブルヒ(敬禮す) 閣下!

國務卿(彼等に挨拶し—舍人グランツを應ねぎ) こゝへ来てくれ! 大公殿下には、今
公太子殿下を御調見中で在せらるゝ。て、公太子殿下が大公殿下の御居間
を御退出在せられたら、直に大公殿下に申上げてくれえ。重大な事件を言

上致したいによつて、暫時拜謁の御許しを願ひたいと。其時になつたら、
わしを呼んでくれえ。わしは彼方に居るから。

グランツ 畏りました、閣下。

國務卿 分つたかね。

グランツ はい、閣下。

國務卿(冷かに士官たちに挨拶して) 左様なら、諸君。(行きかける)。

メツチンク 閣下、失禮ながらわたくしは、祝意を表したいと存じます。——昨
朝公太子殿下には美事に大學の入学試験に御及第あらせられました。こ
れは或程度までは閣下の御庇蔭と申してもよろしいかと思はれます。そこ
で閣下は、私が祝意を表することを御許し下さる筈と存じます。

プライテンブルヒ 私もまた——

國務卿 うむ、如何にも、試験の成績は美事であつた。

メッチング “Summa Cum laude” (優等の成績)と云ふ事でございますな。

國務卿 如何にも、大變に——え——全く——其通りで。

メッチング 殿下はいよいよハイデルベルヒの大學へ御出て遊ばすのでございませうか。

國務卿 その通り。殿下は明朝御出發の御準備を遊ばして御出になる。

メッチング それは非常に面白い事でございますな。

プライテンブルヒ 全く非常に。

國務卿 左様なら、諸君。(出て去る)。

メッチング(プライテンブルヒに) 殿下と一緒に出かけるのは誰だと思ふね。ハイデルベルヒへ。

プライテンブルヒ ふむ！——

メッチング ユットナア博士さ。學校教師の、あの肥大漢の。

プライテンブルヒ そくて、其外には誰かな？——

メッチング 誰かな？ わが親愛なるプライテンブルヒさ、軍人の——騎兵士官

の。殿下が大學へ御入學になるのは、まあ、云つて見れば、初めて世界へ

御踏み出しになるのだ。そくて殿下は學校教師などが御一緒に

前以て十分規定して、正しい規則だつた方法で、殿下を御導き申上げる軍

人でなければいかん。これがわしの意見だ。

プライテンブルヒ 全くだ。

メッチング これが私の意見だ。

第三景

侍従長 (中央の扉より入来る)。

侍従長 式部官のルツツは居るかね。

シエーラアマン 居りません、閣下。直にわたくしが――

侍従長 是非こゝへ来るやうに、左様云へ。式部官ルツツは公太子殿下の御伴を命ぜられた。急いで呼んでくれ。

シエーラアマン 仰せの通り、取計らひませう。閣下。

侍従長 (中央の室へ歸り行く)。

メツチング (やゝ中音にて) 何でもかても、いつも同じ型で支配されるんだ。あの

學校教師は是迄殿下の教育を行つて居た、おほおほ(だから)彼人間が殿下と一緒

にハイデルベルヒへ行くといふのだ。上流社會に勵行さるゝ規則なんてものは、これつばかりも分らない人間が行くといふのだ。

ブライテンベルヒ まあ、君、こんな問題で激昂なんかしないがいい。

メツチング いくら公太子殿下の教育を冷淡に無頓着にするからと云つて、今度の様な事はあるものでない。大公殿下は甥御殿下の教育については、まるで御構ひにならないんだからな。

ブライデンブルロ (欠伸して) うむ、うむ。

メツチング 何でもかても型通りさ。型以外には何にもやらないんだ!

第四景

シエーラアマンとルツツ。

ルツ 殿下は？——

シエーラアマン どうぞ、こちらへルツツさよ。

ブライテンブルヒ お、ルツツか。

ルツツ 男爵。

ブライテンブルヒ うむ、大公殿下は汝に御話になる事があるとの事だ。直ぐに伺ふがい。

ルツツ (中央の扉を通りて退場)。

第五景

侍従長 (中央の扉より登場)。

侍従長 諸君、わしは諸君に御知らせ致して置きたい事がある。殿下は今日は

もう御謁見を賜はらん。そこで、諸君、只今申上げる事に御注意を願ひたい。(書付を取出して読む)。明朝十一時十分、公太子殿下にはハイデルブルヒへ御出發あらせらるべし。大公殿下にも御健康の御都合にて、親しく停車場まで行啓あるべく、朝廷の諸官は悉く供奉すべし。文官は通常服、武官は佩劍の上兜をつくべし。尙此告示は後刻書面を以て一同に送付すべし。(簡単に挨拶して) 諸君、左様なら！

(騎兵士官等は右方に退場、舍人等は急ぎ扉を開く)。

侍従長 フォン、ブライテンブルヒ君、わしと一緒に来ていたときたいと思ふが。(兩人左方に退場)。

第六景

三人の舍人シエーラアマン、グランツ、ロイター残る。三人は暫らく動きもつらて立つ。此時下なる廣庭に護衛の出來たる物音す。しばらく間。

グランツ 公子殿下はいよく御出立かね。此何年といふもの、大きな聲で御笑ひになるのは、あの方御一人だつたが、あの方さへ此頃はやめておしまひ遊ばした。

シエーラアマン(自ら抑へて) しつゝ。

グランツ 老大公殿下は奥に——向ふに御在になるが、窓はのこらず閉め切つてある、これでは宮殿ではない、まるで城寨だ。

シエーラアマン しづかに(立上り)。ルッツさまた。

第七景

ルッツ(中央より出て来る)。

ルッツ(陽氣にて) みんな行つてしまつたのかな。なる程！ シエーラアマン、おまへは旅行の準備をして居るかな。一體何時だえ。十二時と。なる程！ 待つてくれ(グランツに)。こゝへ来てくれ、おい、グランツ、あつちへ行つて、わしの鞆を詰めてくれ。公太子殿下の鞆は四時に持込んで来る筈になつてゐる。その時にはわしも来るがね。おい、ぐつゝしてちやいかん、後生だから。

グランツ(出て行く)。

ルッツ(ロイターに) わしは今日三時に食事をするよ。料理人にさう云つてくれ、何か簡單した淡素したものが欲しいつて。消化は如何も強固でない。それ

から強くないポルドーの葡萄酒を一罇な。

ロイター 畏りました、ルッツさま。(行きかける)。

ルッツ(呼とめて) 少し温めてね。

ロイター 畏りました、ルッツさま。(出て行く)。

ルッツ そこで、シエーラアマン先生、えいと、如何したね。えいと、汝の乗る汽車は五時に出る。すると、汝は何時にハイデルベルヒへ着くかね。

シエーラアマン 明朝七時に着きます。ルッツさま。

ルッツ それでよろしい、てはわれくより至一日先に向ふへ行く事になるね。そこで汝は先發の者が殿下の爲めに準備した室を検査して、それからわれくが向ふへ着いてから必要なものを整へて置くんだね。分つたかね。侍従長閣下は、汝と委しく御相談なすつたらう。

シエーラアマン 左様でございます、ルッツさま。

ルッツ Bon(好矣)。そこで今度はわしの私用だがね。わしは二室欲しいんだ、馬鹿に大きくない、いや——何と云つたらいいかな——餘り贅澤でないな、どうせ、そんな室は大學生などの居る素人下宿には、ちよつと見つかるまいかね。が、シエーラアマン先生、わしには心地のよいといふ事が幸福の因なのだからね。わしは自分の身體に適つた室に居ないといけないのだ。併し云ふ迄もない事だが、一番上等だといふ事になつてゐる室は幾間か、公子殿下の御室として取つて置く様に注意しなければならぬ。それにしても兎に角、——シエーラアマン、わしは萬事萬般大きに氣に入つた——といふ事の出来る様な設備のところが欲しいものだがね。

シエーラアマン 承知致しました、ルッツさま、承知致しました。

ルツツ 殿下の教師、いや侍講としてのユットナア博士に宛はめた二室の方は、なあに大して汝の頭を悩ますには及ばないよ。あゝ云つた人間も、殿下には必要であるから、何處か見つけてはやらなければならんが、併しどうせ大した事ではないんだから、一室だけでも十分だよ。

シエーラアマン 畏りました、ルツツさま。

ルツツ それにあのユットナア博士は、此頃どうかするとわしに對して反對の態度を執る氣味がある、彼人には不似合な事だがね。が、わし位の身分のものは、カアルスブルヒの朝廷では、其地位がたしかなものなんだからな。ところがあの博士は、有難い事には、一年も経てば、もう用がなくなつてしまふんだ！ 而して自分から暇を取る事になるんだからな！

シエーラアマン 如何にも。

ルツツ 併しあの博士のやり方はわしの氣になるんだ、わしは平氣で居るわけには行かないんだ。(舞臺を歩き廻る、間)ところが大公殿下は、わしに御好意を御示し下された。殿下が今しがた、わしに如何な事を仰つたか、汝は知つてるかな。殿下はかう仰せられたよ。「ルツツ、余は汝を信任して居るぞ」とな。

シエーラアマン 全く特別の思召でございますな。

ルツツ 公太子殿下は、世間の事情にかけてはまるで小供に御過ぎにならないのだ。人間同士の事については、丸て何にも御存じがない、嚴重にカアルスブルヒの城壁の中に閉ぢこめられて居た罪のない青年であらせられるのだからな。殿下はその圍ひの外に出られた事は御有りにならないかつたのだ。

シエーラアマン 全くその通りで、ルツツさま。

ルツツ ハイデルベルヒへの御供に、一人も舍人や、其外の召仕を御選びにならんのは、その爲めなのだ。わしの外には――

シエーラアマン 何故でございませう、どういふ譯なのでございませう、

ルツツ と、云ふのは、此わしはハイデルベルヒへ行つても、どこまでも禮儀を守つて行く人間なんだ。冷かな頭と、明晰した脳とをもつて居て、おまけに朝廷の上品な生活の事にあかるい人間なんだ。そこで、シエーラアマン、おまへは出發してもよろしい。向ふへ着いたら直ぐ知らせよこしてくれ。而してわれ／＼の乗つて行く汽車の迎へに来てくれ。而してわれわれが着く頃に、馬車を停車場へよこす様にしてくれ。

シエーラアマン 承知致しました、ルツツさま。

ルツツ(やさしく) では、いづれまたハイデルベルヒで逢はう。

シエーラアマン(感歎に) また、御目にかゝります。ルツツさま。

第八景

博士戸口にてシエーラアマンに逢ふ、シエーラアマン恭しく戸を開く。(博士は丈低く、がつちりして、肉肥え、息急しく、「酒落氣のなき人なり」)。

博士 公子殿下はあちらに御居てかな。

シエーラアマン 殿下はまだ太公殿下に御謁見中てございます。(退場)。

博士(ルツツに) 鐵道案内をもつて来てくれ。

ルツツ(冷淡に) 何ですつて?

博士 フランクフルト行きの汽車は、何時に立つかね。朝かね。何時われ／＼はハイデルベルヒへ着くかね。夜遅くなるだらうね。ちよつと見てくれ。

ルツツ 誰に？ わたしに？

博士 われ／＼は夜の八時か九時迄は、向ふへ着けまい。(獨語)。あゝ有難い！
明晩はハイデルベルヒだ。もうたつた一日一晩だ。(聲をあげて)。鐵道案内は
わしの室の、卓子の右手の上にあるよ。左様でなけりや、窓の側の大きな
箱の上にあるよ。

ルツツ(不機嫌)。

博士(大きな聲にて獨語)。八年の間この城壁の中を出不入に居て、明晩はもうハイデ
ルベルヒだ！ 有難い！ あゝ、老衰の一學校教師が、あの懐かしいハイ
デルベルヒへ行つて、再び一箇の人間らしくなるのだ。おい、ルツツ、吃
驚したらう！ 君だつて、永久にこゝへ拘禁されて居た人間で、逃げ出し
もされなかつたぢやないか。時に君は、ハイデルベルヒへ行つた事がある

かね。

ルツツ(冷然として) 如何だか知りません。

博士 鐵道案内を、早く、早く。

ルツツ(不機嫌にて) 失禮ですが、博士。

博士 えい？

ルツツ 失禮ですが、わたしは如斯いふとを申上げて置きます。此宮中を使ひ
走りするのは、わたしの職務ではありません。

博士 えい？ 何を馬鹿々々しい。わたしは鐵道案内が欲しいんだ。

ルツツ(戦へるほど腹を立て) 馬鹿々々しい！

博士 ルツツ、わたしは君にしたい事があるんだ。そんな下らん事は云はない
事にしてもらはう、旅行中でも、ハイデルベルヒへ行つてからでも。われ

くは君をつれて行くのだから、君もそれで満足が出来る筈だ。それに私は今日は怒りたくない。私はそんな気にはなれないんだ。が、そんな容子振は御免蒙らう。そんな事はカアルズブルヒの宮中では流行るが、ハイデルベルヒでは、一寸でも我慢をする人はないよ。好いかね。

ルツツ えー——博士。

博士 しつ！(獨語)。如何したらいいかわけが分らない。時計屋から時計を取つて来て、洗濯屋から洗ひ物を取つて来て、本を荷造して、暇乞に歩いて、送別會に出て、送別の酒を呑んで——有難い！ われくは再び若くなるんだ。(悲喜の感情交も臻る)。

第九景

同じ人々。國務卿右手より登場、舍人外側より扉を開く。

ルツツ(敬禮す)。

國務卿 公太子殿下は大公殿下と御一緒かな。

ルツツ(敬禮して) 左様でございます。閣下。

國務卿(他の人には目もくれず、室の中を左右に歩きまはりしが、顔をあげて、ルツツを見、手振にて立去らしめる)、わしはこゝで御待申上げるとしやう、うむ。(椅子に凭る)。

ルツツ(敬禮して、退場)。

博士(又退場せんとして敬禮す) 閣下！

國務卿(はじめて博士が目に入りし如く見上げる)。ユットナア博士、わしは氣がつかな

かつた。

博士 えー、閣下(退場せんとして)。

國務卿　こゝに残つて居ていたゞきたい。まあ、おかけなさい、ユットナア博士。いろ／＼御相談したい重大な事件があるんです。公太子殿下の資格試験は、昨日國務卿と大公殿下の御前で施行されました。ところが豫期した通り、實に美事な成績で通過されました。そこでユットナア博士、あなたは八年間殿下の教育の任に方つて下された。て、わしはあなたに御知らせする。此大成功の機会に於て、大公殿下にはあなたを樞密顧問宮に任命せられた。

博士　閣下、そ——それは意外でございますな。

國務卿　顧問官、あなたはこれがために此の一定安固な官職に附随する社會上の位置を獲得されたわけだ。そこで私は祝意を表したいのです。

博士　有難う、閣下。

國務卿　が、顧問官、あなたには尙まる一年間重大な責任があるのです。近來、大公爵家の方々は、一年の間、大學の教育をうけてもよいといふ慣例が出来たのです——わしには「不幸にも」といふべきものか如何かは分らんが。兎に角大公殿下が、此慣例に従つて、公太子殿下をハイデルベルヒへ御送りになる事に御決心になつたについては、此一年間に、公太子殿下が、從來教育されて居られた習慣から離れてしまふといふ様な事が起りさうに思はれる。如何でせう、わしの云つてゐる事は、十分御解りになりましたかな。

博士(苦笑しげに)　え、／＼、閣下。

國務卿　顧問官、けふの午後五時に、尙一度わしを官邸へ尋ねて来ては下さらんか。左様すれば私は、殿下がハイデルベルヒ御在學間の、詳細な修業上の御規定と、日々の御生活を編成した日課を、あなたに御渡したいと思ふ。

博士(激昂して立上り) 日課。

國務卿 如何にも、日課です。

博士(いよく激昂して) ハイデルベルヒへ行つても、萬事日課にしたがはなければならぬのですか。

國務卿 如何にも左様です。如何にも左様です、顧問官。

第十景

舍人(内側より中央の扉を開き、呼上げる) 公太子殿下。

國務卿 あゝ！(立上る)。

博士 (同じく立上る)。

(間)

公太子カアル・ハインリッヒの最初の演出者

伯林の俳優 ハルリー・ワルデン



大正十一年三月
田中義一
田中義一の肖像
田中義一

第十一景

公儲（登場、短き間の後進み来る）。

國務卿（敬禮す）。

公儲 あゝ、國務卿。如何だね、國務卿。どうだね、博士。（稍不安げに）國務卿はわたしを待つて居たのかな。

國務卿 わたくしは殿下の此度の美事な御成功につきまして、御祝ひを申上げたいと存じます。

公儲 有難う、國務卿。全く——その——（稍不安げに）。國務卿、まあ憚けたら如何だね。

國務卿 憚りながら私は、大公殿下の御希望により殿下がハイデルベルヒの御

學年間のために、特に作りました規定について、少々申上げて置きたいと存じまするが。

公儲 さあ、どうぞ。

國務卿 大公殿下には、殿下に同伴致すべき人物をば、宮中に属する紳士の一人から選抜致し、尙武官をも御附申すといふ御希望を御見合せになりました。と申すのは、大公殿下にも非常に御希望であらせられます通り、殿下が御在學中の一年間は、御學問の修養も發達も、すべて従前通りに遊ばされ、尙殿下に於せられては、遊戯三昧にその期間を費さるゝ様な事なく、御學問の御修養に必要な、嚴格にして規律ある努力を以て御勉強あらせらるゝ様にとの事でございます。

公儲 (首肯)。

國務卿 勿論——

博士 (激昂して) 失禮ながら閣下、私はその——その(語に窮してまごつく)。

國務卿 勿論殿下はかういふ事實を等閑視なさる事はござりませぬ。ハイデルベルヒの様な絶景の都に御住ひになると、全然氣を御變になる事が出来ませぬ——其事は決して輕々に見過すべき事ではござりませぬ。彼の都には森やら山やらが有つて、殿下の御勉強の御餘暇には屢ば殿下の御氣を安め、歴史上思ひ出多き彼の有名な古城に、殿下の美術眼を御止めになる場合には、愉快に御感じになるに相違ござりませぬ。あの古城は、ペーメーン國王陛下の城趾でござりまして、白山の戦ひの後、陛下はあそこに隠棲あらせられたのでござります。

公儲 (うなづく)。

國務卿 樞密顧問官ユツトナア博士は、萬事御引受け申しまして――。

公儲 樞密顧問官ユツトナア博士？。

國務卿 樞密顧問官ユツトナア博士は、萬事御引受け申しまして、其新生涯に於る殿下をば、熱心と注意とを以て、御指導申し上げる筈でございます。(立上る)。殿下、憚りながら、殿下が一年の後御歸國あらせらるゝ際には、私は殿下の御健勝な體を拜し、祝意を表する事の出來ますとを希望致して居りますのでござりまする。

公儲 閣下、また逢ひますよ。

國務卿 私は明朝御出發を御見送り申上げたいと存じまするが。

公儲 送つてもらひたいものです。

國務卿 (敬禮して退場す)。

公儲 (戸口まで共に行く)。

第十二景

公儲と博士。

博士 (臂かけ椅子に身を落し、深く太息す) あゝ！

公儲 顧問官、如何したね！

博士 はい。わたしは今にザクセンの勳章を貰ふてせう。それから先の事は神様でなければ分かりません。

公儲 博士、何を云つてるのだ、如何したといふのだ。

博士 あゝカアル・ハインツ、一人で行つしやるがいゝ、わたしは御一緒は御免だ。わたしは十分やりました。もう此以上やりたくは無ゝ。あなたの好

きな様になさるがい。が、わたしは問題外にしていたらかう。わたしは八年の間自分の職分を盡した。もう此以上やる氣はない。

公儲 如何したのさ。

博士 學問の日課！ 嚴格にして規律ある努力！ ハイデルベルヒへ行つても何の愉快がなく、たゞ奮闘的に心の修養をする！ カアル・ハインツ、こんな事はあなた一人てなさるがい、わたしは御一緒に御免だ。御一緒に御免だ。

公儲 博士、まあ、ちつとやさしく話をしやうね、老博士。

博士 全く、わたしは老人です。それが適評です。わたしもカアルスブルヒへ来た時には、若い人間でした。あなたは丁度こればかりで（手で高さを測る）。あ、カアル・ハインツ、あなたの爲めてなければ、わたしはこんな處に

返まつては居なかつたのだ。奴等は今日迄あなたを此城壁の中に閉ぢこめて居た、カアル・ハインツ、光もなく、空氣もなく、喜びもない、此城壁の中に。わたしは何百回となく、行つてしまふと決心した。が、わたしは其決心を實行する勇氣はなかつたのです。

公儲 なる程。

博士 が、いづれハイデルベルヒへ留學されるといふ一つの期望、一つの樂しみがあつたのです。あなたとわたしがたつた二人て其處へ行く。而して其二人はとうとうそこで人間になる！ところが如何です。奴等は學問の日課なるものをもつてやつて来る。嚴格にして規律ある努力！何でも勝手にするがい！

公儲 併し博士——

博士 はい、わたしは落着いて居ります。わたしは静かに致します。もう何も申しますまい。宮中の習慣にしたがつて何にも喋りません。われ／＼は呼吸する事すら忘れさせられる、われ／＼は息が止まつてしまふ——息が止まつてしまふ。

公儲 博士、わしを一人置いて行つてはいけない。

博士 (稍低聲に) まあ、いゝさ——兎に角ハイデルベルヒといふ處はですな。

いや、あなたはハイデルベルヒを御存じがない、ハイデルベルヒがどんな處かといふ事も屹度御分りにはならない。ハイデルベルヒはセクト(酒)を呑むやうなところだ。いや——之は適切でない——それ以上だ。バーテンの葡萄酒、マイの葡萄酒、それから若い女に、快活な青年。わたしはあすここに三年居ました。カアル・ハインツ、が、わしはもう行きませぬ。

公儲 しかし——

博士 あなた一人て御旅行なさい、顧問官は御連れにならんが。ハイデルベルヒへ學問の日課をもつて樞密顧問官をつれて行く——まあ考へて御覽なさい——そんな事のあらう例はない。そんな事は臆言に過ぎない、とより外に云ひやうがない。

公儲 博士、さあ、わしと一緒に御いて、二人で葡萄酒の盃をあげやう。さうするとまた考へが直に變つて来るよ。博士。

博士 いや、いや、葡萄酒もいけません、酒精もいけません。酒を飲むとも出さず、心臓病で苦しんで居る人間なぞが、ハイデルベルヒへ行つたつて、如何なるものですか。此宮中の奴等はわたしに無暗に食はせてばかり居る。だからわたしは死にかゝつて居る。食ふ事に飲む事——この二つだけが奴

等の唯一の楽しみなのだ。のこらず運動もせず、始終じれてばかり居る。

而して八年の間誰一人動く事も出来なかつた！

公備 ハイデルベルヒへ行くと別になるよ。あつちへ行けば汝も丈夫になるよ。博士。

博士(腰をかけ)それは其通りでせう。が、わたしはハイデルベルヒへ行く必要はないぢや有りませんか。私の様な人間はカアルスバットの温泉へても行つて、保養ばかりして居る金持の市民の様に、傘と巾着とをもつて、散歩に出かける位なものです。ハイデルベルヒは、老朽者の居る場處では有りません！

公備 博士、わしを置き去りにしてはいけないよ。左様なつたら私は如何なると思ふ。

博士(やさしげに) さあ手を握りませう。あゝあなたは自分の氣に入らないとがある、いつでもこんな風に仲直りをなすつた。而していつも負けるのは誰かといふと、此わたしです。まあ、まあ、カアル・ハインツ。今度も左様します。よろしい、一緒に参りませう。どうも外にはしやうがない。あなたが年を召されて、過ぎ来し方を振返られた時、こんな事を云つてはいたさたかない——あの博士の畜生が、わしに悪戯をして、わしの青年時代、わしの大事な時、わしの生涯の最も好い時季を誤らせやあがつたなど、云はれない様にしたのですから！

公備(博士の肩をつかみ、陽気に揺ぶつて) 博士も一緒に行つて呉れる！老博士も一緒に行つて呉れる！

博士 何ともなるがい、カアル・ハインツ。わたしは再び若くなるんです。

(悦ばしげに、されどたい半ば高聲にいへるのみ、さながら自分の幸運を信じ得ざる人の如く) 明日はあなたとわたしと汽車の中で二人ぎりになるのだ。アイゼンナツハ、フランクフルト、ダルムスタット、ハイデルベルヒ！マイン河に、ネツカア河！

公儲(博士をゆすぶり) 老博士も一緒に行く！

(下の廣場に大鼓の音聞ゆ)。

博士 あゝ人を吃驚させやあがる！大鼓の畜生！うむ、いつでも鳴らせ、鳴らせ、もうそんな音はわれ々には関係がない。汝はわれ々以外の人だけに鳴るやうになるのだ。

公儲(笑ふ)。

博士 あなたは世間の事はまるで分つちや居られん。あなたは全然御存じが

ない。あなたの御存じなのは式部官に舍人ばかりだ、カアル・ハインツ。あなたは何にも御覧になつた事がない。

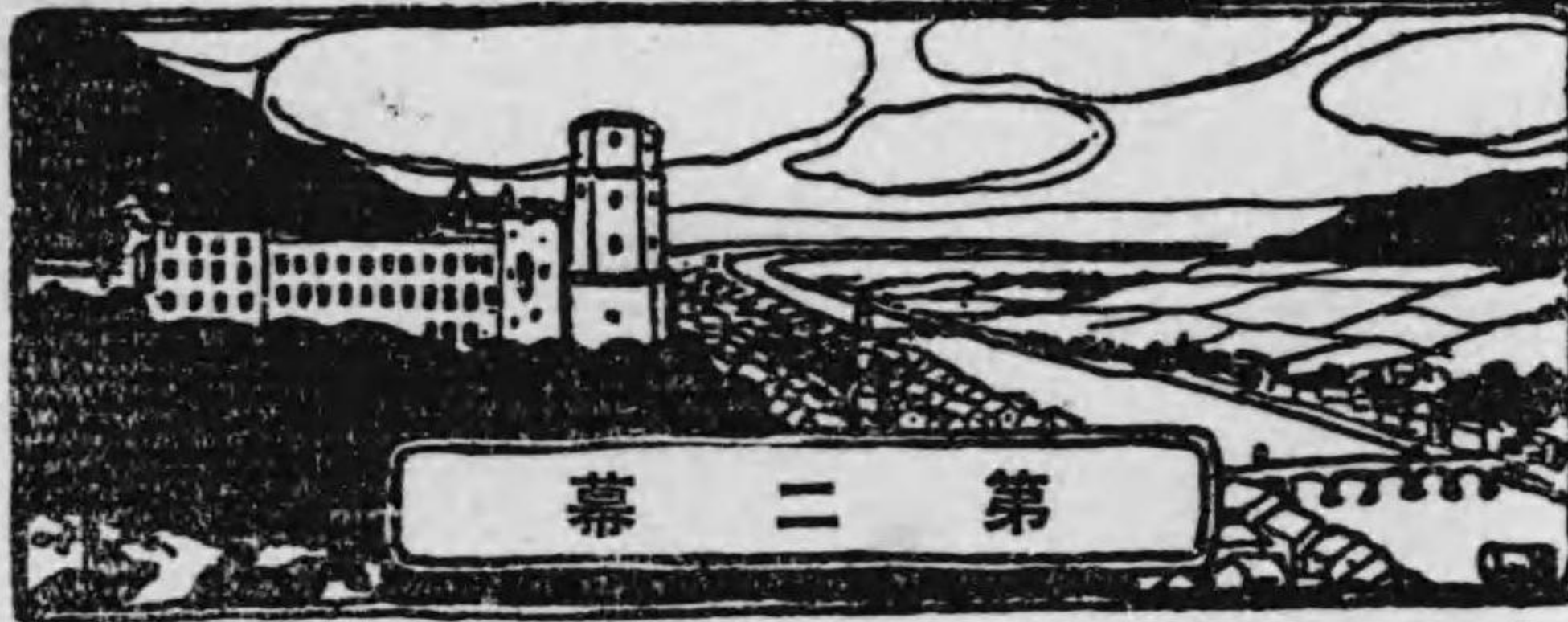
公儲 博士、そんな誇大にいふものではない。

博士 まあ、私にみんな喋舌らしていたじませう。ね、あなたはまるで何にも見て御出でにならない、人間も、學生も、若い女も——そんなものは重なものでは有りませうがね。あなたはこれまで一人で町を歩いた事も御ありにならない。

公儲 そんな事は大了た事ぢやないぢやないか。

博士 いや、それは大切な事です。といふのは、何人でも一人で町を歩いてもよいもので、又歩くとの出来るものです。さあ、一緒にまゐります。(行きかゝりて再びとゞまり、嬉しげにおの手を、公儲殿下の肩に置きながら)。あゝカアル・ハイ

ンツ。あなたは目をまるくなさるよ！ハイデルベルヒ！あなたは目を丸く
なさるよ！



ハイデルベルヒなるリュウダアが酒屋の庭。低い石垣はネッカー
河より庭を隔つ。はるか彼方に、ハイデルブルヒの王宮見ゆ。

第一景

亭主 リュウダア、リュウダアが妻。其叔母デルフェル。

亭主 用が多過ぎらあ！二本の手にやあ、全く用
が多過ぎらあ！ケテイイは、何處へ往きやあが
つた。こゝへ来て手傳つてくれりやいゝのにな
あ。

妻 静かにあしよ、リュウダア！ けふは怒つち
やあいけないよ。

亭主 舌あ動かすねえ！ もう七時半だ。王子さま

はもう停車場へ着いたんだ。今にも馬車あこへやつて来るんだ。王子さまは六つの室を見て、それから夕飯をくつて、それから八時には學生さんが、庭で倶楽部の集會をやりに来る。さあみんなに卓子や腰かけを出してやるんだ。屹度食物も呑物も要るんだ。それをのこらず一人て氣を附けるんだから、用が多過ぎて堪りやあしない。

樂手(樂器の調子を合せる)。

妻 一學期の間眞物の王子さまを御泊め申す宿屋は、ハイデルブルムには外にはないからね。

叔母 一つもないね。

亭主 全くその通りだ。時にケイテイは如何した。

妻 ケイテイや!

ケイテイに扮したる

維也納皇室座女優

ローザ・レットアイ



ロイヤル・パン・ドゥール

蘇州 蘇州 蘇州 蘇州

ロイヤル・パン・ドゥール

亭主 こゝへ来て手傳つてくれなくちやあ困るなあ。何もかもてんこしやんこだ。

妻(呼ぶ) ケタイイヤ、こゝへ来て手傳つておくれ!

亭主 卓子をもつて来なけりやあならねえ。何にも出来てねえ。

妻(呼ぶ) ケタイイヤ!

ケタイイ(舞臺の奥にて) 今直ぐに行きますよ。

亭主 音楽の連中に手を借りなくちや、彼の連中は、學生さん方の来ない中に、もうやり初めてやあがる。

妻 なあに、たゞ調子を合せるんですよ。

亭主 おれにはどつちでも同じ事だ、彼の連中に手傳つてもらはふ。

第一の樂手 これは何處へ行くんです。

亭主 庭の端の方だ、ネツカア河の右手だよ。シユワアベの連中が前へかけて、それからファンダレ連、それからザクソ・ブルツセ連さ。ザクセン連はウエストハアレ連と右手へかけて、それからレナーネ連が末の方へ（太息をつく）。これだけの事を皆な一人の頭脳へ入れて置くなあ、中々大變だ。

第二景

ケティイ 左方より入来る。

ケティイ あゝ、わたしちよいと休まして貰はなくちや。あつちからも此方からも呼ばれるんだもの。まあ！ 叔父さんは燕尾服なんか着て！ まあ一寸とこへ来て御覧なさい、ぐるりと廻つて。立派に見えないこと（樂手にいふ）。それでいゝわ、さあ皆さん、手を貸して頂戴な。左の方へびつたりく

つゝけて。その花環を取つて頂戴な。（卓子の上より大なる美事なる花環を取上げる）。妻 おまへ、あの新らしい白い着物を着て来たの。

叔母 あの新らしい白い着物かい。

ケティイ 王子様がお出になつて、それから妾を御覧になつて、それから妾が花環をもつてこゝに立つて、それから詩を讀んだら、わたしどんなに鼓動がするてせう！

亭主 王子様はおめへを取つて喰ひはしやあしねえよ。

ケティイ わたし昨夕あの人の夢を見たの。あの人は首のまはりへ金の星をぶら下げて、町を歩いて居らつしやるの。それあ立派に見えたわ。で、わたし詩を讀まうとしたら、一番初めの語が思ひ出せないの。妾情なくなつて、御祈をはじめたの、『耶蘇さま、マリヤさま、ヨーゼフさま、妾に初めの語

を御聞かせ下さいまし』つて。

妻 さうしたら？

叔母 さうしたら？

ケティイ 妾吃驚して目がさめたの。

亭主 此娘はあれをしつかり頭へ入れやうたあしねえんだ。王子様は、引かへして、外のところへ下宿しやうと仰有る様な事になるかも知れねえぜ。

ケティイ(笑ひながら) 妾も左様思ふわ。さあ、また稽古を初めませう。そこに叔父さんが立つて、そこに叔母さんが立つて、それからそこに大叔母さんが立つてるの。其通り！それから王子様が入つていらしつて、それから妾が前へ出る、それからわたしが讀む——あら違つてるわ。かうするんだつたわ。そのところに叔父さんが、花環を手にもつて立つて居るのよ。而

して王子様が入つていらつしやると妾が前へ出る、叔父さんが妾の方へ花環を持ち出す、妾がそれを取る、それから讀む。(學生達の近づく物音聞ゆる)。耶

蘇さま、マリヤさま、ザクセン！

亭主 學生さん方あ、もうやつて来た、二本の手ぢやあ用がしきれねえ。

第三景

舞臺の後に、馬車の走る音、鞭の音、犬の吠ゆる聲。人の笑ふ聲、高く呼ぶ聲、ギョ
々アの音、種々なる物音、雑然と聞ゆ。やがて濃藍と薄藍と白のハンドをかけ、紺の學
生帽をかぶりたるザクセン組合入り来る。

人々の聲(舞臺の後に) ケラアマン！

ケラアマン(舞臺の後に) はー！

他の人々の聲(舞臺の後にて) ケラアマン!

ケラアマン(舞臺の後にて) こゝに居ります!

ケティイ(右方より呼ぶ) そんなに騒ぎ立てちやいけませんよ、あなた方は他の連中がみんな一緒になつたよりも、もつと騒々しいわ。犬をしつかりと縛つて置いて下さい。まあ〜!

第一の學生(奥にて) いやあ、ケティイが白い衣服を着てるぜ!

第二の學生 これあ驚いた、ケティイ!

エンゲルブレヒト 雪の如く白く。美事なもんだ! おい、みんな白い衣服のケ

ティイを見給へ!

ケティイを圍んで一同入来る。

ケティイ 放して頂戴よ! あなた方はなんて馬鹿な事をするの! 馬車を待

たして置いてはいけませんよ。町はまるで一杯なんだから。そんな事をしちやいけませんよ。

伯爵アトレーヴ・フォン・アステルベルヒ お待ち、ケラアマン。

ケラアマン はい、伯爵さま。

アトレーヴ ケラアマン、犬をあつちへ連れて行け。僕は演説をする。

一同 Bravo! (よろ〜) 演説。

ビルツ あゝ、出たらめなんか止すがいい、アトレーヴ。

アトレーヴ カアル、僕は美に對して尊敬を拂はふと思ふんだ。邪魔をしちや

らん。

ビルツ あい! — 新入生 — それから —

アトレーヴ ケティイは白い衣服を着けました。頭から爪先まで着けました!

誰一人として、これまで僕が婦人の前に跪くのを見た事はない。而して誰一人として、二度と再び僕がその様な事をするのを見る事は無い。親愛なる新入生諸君、廣く諸君の目を開け！これ實に歴史上の大事件である！

(兩膝をつき) カテリリーナ！

ケティイ(笑ひながら兩手でデトレージュの頭をおさへ) あなた又皆なに決闘で斬られたの。可あいさうに。

デトレージュ(ギョタアをかき鳴して) それがしは忠實なる僕として、おんみが前に跪づく。最も美しき婦人、府中伯の夫人さま。

ケティイ まあ〜！ あなたの頬は、何處から何處まで、ぎざ〜に傷がついてるよ。まあ何て容子だらう！

デトレージュ それがしに命じたまへ。さらばそれがしは如何なる馬鹿けたる事

をも致し申さん。最も美しき婦人、府中伯の夫人さま。

ケティイ(忙がしげに他の人の方を向く。此人の頭は悉く繻帯をかけ居る)。あゝ、セツベル。

いゝ氣味だわ。なんて喧嘩つばやいんだらう、此人は！

デトレージュ 新入生諸君、僕をもち上げてくれ給へ。ケラアマン！

ケラアマン はい、伯爵さま。

デトレージュ ケラアマン、椅子をもつて来い。僕は腰をかける。リユダア叔父

汝の姪の胸は石で出来てるぞ。ケラアマン！

ケラアマン はい、伯爵さま。

デトレージュ 刷毛を。

ケティイ こゝに幾人居るの、八人、九人、十人と。麥酒をこゝへもつて来ませうね。(退場)。

デトレーヴ 叔母さんは何處に居るね、いやあ、如何したね、リエター叔母さん。何か食ふものはあるかな。あや、あや、くく！ 叔父貴は燕尾服を着てるね。

音楽手(一寸法師のベルケオを奏し初む)。

エンゲルブレヒト ケラアマン、繪葉書を一枚。

ケラアマン はいく。

デトレーヴ(ギンターをかき鳴らしつゝ歌ふ)。

ハイデルベルヒのお城の中に、
一寸法師のベルケオが住んで居た。
身丈は小さく瘦せぼちなれど、
呑むにかけては大男。

隣り近所ぢや馬鹿だといへど、

ベルケオ自身ぢやかういふた。

おらが仲のいい友たち、あさし、

地べたじめくしめつて居るが

あらと一緒に住つて御覽、

智慧もますますぞえ、氣もつよくなる。

一同共に歌ふ。

音楽手(第二節を奏し初む)。

デトレーヴ 待てく！ これは町人の歌だ。こんな音楽をやつては、ハイデルベルヒの名折れになる。こゝへ來給へ、諸君。
樂長 伯爵さま！

デトレイヴ わが敬愛する諸君、何人にかはらず、かゝる歌を奏する光榮を有する場合には、其人は是非とも自己の事業に全精神を打込まなければならん。光榮も愉快もともに！ 僕は諸君のためにポーレー（酒の名）を命じなければならん。かくして諸君の熱心なる精神は、僕のいふ事を呑み込む事が出来るやうになる筈だ。

樂長 どうも難有うございます、伯爵さま。

ケティイ（兩方の手に多くの麥酒呑みをもつて） 皆さん、さあ、わたしと一緒に御出なさい。（左の方へ行く、一同あとから続く）

デトレイヴ ケラアマン！

ケラアマン はい、伯爵さま。

デトレイヴ 音楽手たちにも一杯やらうぢやないか。

ケラアマン はい、承知致しました。（一緒に退場）

第四景

亭主、妻、その叔母、後にルツツとシェーラアマン。

亭主 二本の手ぢやあやり切れねえ。

叔母（急いで登場） 皆様が御出でだよ、皆様が！ 向ふを御覽、皆様が御出でだから！

妻 王子さまが！

叔母（氣をいらつて） さうだよ、眞實に！

亭主 ケティイは何處へ行きあがつた！（馬車の音聞ゆ）

妻 汝さん、戸外へいかなくちやいけないよ。リュウダア。御出迎をしなく

ちや。

亭主 王子様は何處に居るんだ——どこに——何處に。

ルツツ (高帽にフロックコートにて登場。周囲を見て驚き、やがて一語々に力を入れ、冷静の調子にていふ)。あゝ、こゝが眞實のどこなのか。

シエーラアマン はい、左様でございます、ルツツさま。

ルツツ この家が——

シエーラアマン はい、左様でございます、ルツツさま。

亭主(あせつて) あのなには戸外でござえますかね。王子様は戸外に立つてるんでござえますかね。

ルツツ(冷然に) 此人間は何だな。

シエーラアマン 亭主でございます、ルツツさま。

亭主(まごついで) あの人は戸外に居るのでござえますか。

ルツツ(冷然と高くとまつて) 殿下は、此の邊の容子を知つて御置きになる爲め、

御馬車で方々を御見物においてになつた。その間に馬車から荷物を持ち込むやうにしなけりやならん。

亭主(呑込みわるく) あの人は戸外でござえますか。戸外に立つて居るんではござえますせんか。

ルツツ(眞拳に、きれどあせらずに)。實に驚いた、シエーラアマン。汝は昨日以來、

殿下に適當な御場所を探す爲めに、このハイデルベルヒに居つた癖に、殿下に對する行儀作法を、此人間に教へやうとも思はんといふのは何事だ。

シエーラアマン ルツツさま！

ルツツ まあ、それあ好いさ。

シエーラアマン わたくしはその致しましたので——私はその——
ルツッ それ面白いと云つてるぢやないか、シエーラアマン。が、その中思ひし
らせてやるぞ。(眼鏡をあてる)。此家は水邊に立つて居るな。この川は何とい
ふのだな。

亭主 ネットカア河でござえます。

ルツッ ネットカア。よし！が、わしはリウマチを病つて居る。シエーラアマン
それだのに汝は水邊に部屋をとつたな。

シエーラアマン(まご／＼して) ルツッおや。

亭主 こゝはハイデルベルヒで、一番心地のいゝ下宿でござえます。フォン・フ
ユルステベルヒ伯爵さまも、三學年の間こゝに居りましたよ。

音楽手(遠くの方にて調子を合する音聞ゆ)。

ルツッ 音楽が初まりさうだな。何の音楽だ。

亭主 學生俱樂部が今日其發會式をやりまして。今にもつと参りますよ。

ルツッ こゝへか。

亭主 へい、左様でござえます。

ルツッ うむ！(烈しき労働をしたる爲め、疲れ果てたる人の如く椅子にかける。半ば獨語の如く)

汽車で十二時間の旅をして、日がな一日窘められて、揚句の果は盜賊の巢
へ飛び込んでしまふ！

亭主 御城を見るには、こゝが飛離れて一番よろしうござえますよ。

ルツッ あれは如何な城だ。

シエーラアマン(ひどくまご／＼して) 向ふに——向ふの方に。

亭主 向ふの城でござえますか。

ルツツ 如何な城だと尋ねるのだ。あれは誰が有つてるのだ。誰が住んでるのだ。

亭主 毀れちめえましたので、佛蘭西人が大砲の彈丸で毀しつちめえましたので。

ルツツ ぢやあ城ではないぢやないか。毀れてしまつたのなら、もう城ぢやあない、舊蹟だ。この町のはみんな舊蹟見た様だ。

亭主 うんにや、舊蹟はあれだけでござえますよ。

ルツツ まあ好い。

亭主 まつたくあれが此町の唯一の舊蹟でござえますよ。

ルツツ シエーラアマン！

シエーラアマン ルツツさま。

ルツツ 此男にはやり切れない。(太息つき) 左様だ。 (疲れた様に立上り) 部屋を見やう。

シエーラアマン (急いで) どうぞ此方へ、ルツツさま。

戸外には又新らしく、鞭の音、人聲、馬車の音、犬の吠ゆる聲、人の笑ひ聲、呼び合ふ聲。『高い處から来るのは何だ』の音楽初まる。

ルツツ あれは如何したといふのだ。

亭主 皆さんがやつて來ましたので (呼ぶ)。ケティイ！ シュワアベの連中がやつて來たよ。

妻 ファンダレの連中も來ましたよ。

亭主 ザクソ・ホルツセも。みんなやつて來た。麥酒をもつて來い。麥酒をもつて來い。

カツッ(いよく腹立たしげに、侮蔑の色を以て此有様を見る)。如何したといふのだ。誰が来るんだつて。大變な人間だな。

第五景

舞臺は金色のシェワアベン、紺色のレナードランド、白のザクセン・ホルツセ、赤のファンダレ線のウエストフアリアなどの組合の學生にて一杯になる。ザクセン組合は左より登場。多數は口笛を吹き或ひは歌ふ。犬は二匹つゝ一縛にして牽き來られ、其吠ゆる聲は一層騒しさを高む。多數は家の中より椅子を持ち來り、他の學生は卓子をたゞく。「麥酒! 亭主! ケティイ!」など叫ぶ聲限りなし。やがて音楽は奏せられしが、次第にしづかに緩やかになりて、人の談話を妨げぬ様になる。

第一の學生 いやあ叔父貴!

第二の學生 諸君、僕は咽喉が渴いて死にさうだ。

第三の學生 亭主!

第四の學生 ケティイは何處へ行つた。

一同叫ぶ 麥酒! 亭主! ケティイ! ケティイ! 叔父貴!

第一の學生 河へ犬を投げ込め! Allezi (行け) Apporti (あれを持って來い)。

他の生數人(うたふ) 「あれはポステロン(馬車の御者)だ、さうだ、さうだ、ポステロンだ。」

ウエデル これや實に怪しからん! 何てやりかただ。ケティイも居なければ、麥酒もない! 諸君、僕はリュウダア叔父貴を焼いて食つてしまはうといふ事を提議します! さあ、火はおこつてるかね。(亭主をゆすぶる)。ケティイは何處に居る。
亭主 知りません。

ウエアル(亭主をゆすぶつて) ケティイはどこへ行つてるんだ。

亭主(やけになつて) 手が二本ぢや全く用が多過ぎませあ。

ウエアル ザクソ・ポルツセ、"Silentium!" (黙れ) リエウダア叔父、僕はケティイに逢ひたいんだ。こゝで、此場所。新入生連、あつちへ行つて探して来てくれ。人間の記録あつて此方、如何なる婦人の手にも落ちた事のない程の敬意を表するのだ。(合圖を與へ)。伯爵フォン・アステルベルヒ。サキソニア君、僕は君の健康を祝して満を引きます!

アトローツ 有難う。僕も乾杯ませう。

ウエアル 乾杯!

呼ぶ聲高し ケティイ!

呼ぶ聲愈高し ケティイ! ケティイ! Bravo!

一同一齊に叫んで、ケティイが今や現はれんとする方に向く。ケティイ中央より笑ひつゝ出て来る。自から保護せんとするが如く、兩の手を双方に上げる。

ウエアル ホーラア、ケティイ!

一同 ケティイ! ケティイ!

ケティイ(傍若無人に笑つて) 皆さん、氣が違つたの。

ウエアル ケティイ、さ、手を握らしてくれ。

ケティイ(自分を防いで) 止して下さい!

ウエアル Silentium! (止せ)。音樂手! Silentium! (黙れ)。ザクソ・ポルツセ

ケティイ 離して下さい。

ウエアル 諸君、沈黙されんことを希望します。

多數まあ、如何したといふんだ。如何いふわけなんだ。

ウエデル 諸君。親愛なるハイデルベルヒの學生組合。諸君——今や、光榮ある學期の初めなる五月の月であります。諸君、五月の月には、われ／＼は誰に光榮の冠を捧げたものでせう。——婦徳と、美とにてせう。(笑ひながら)。ケティイ、じつとしておいて、諸君、ハイデルベルヒに於て、最も美しい、最も優しい、最も淑徳の婦人はケティイであります。僕は諸君の名譽にかけて質問します。誰か此宣言に反對せんとはする。

ケティイ(眞赤になり、殆んど泣出しかけて) 放して下さいつてば。

ウエデル(鐵腕を以てケティイをしつかと掴み) 一人も反對はない。諸君、今晚學生組合の發會式に於て、ザクソ・ポルツセは、ケティイに向つて、その團體のバンドを受くるの名譽を與へます。これはハイデルベルヒの他の女は一人として受ける事の出来ない好意の徴であります。(ケティイの肩より、絹のバンド

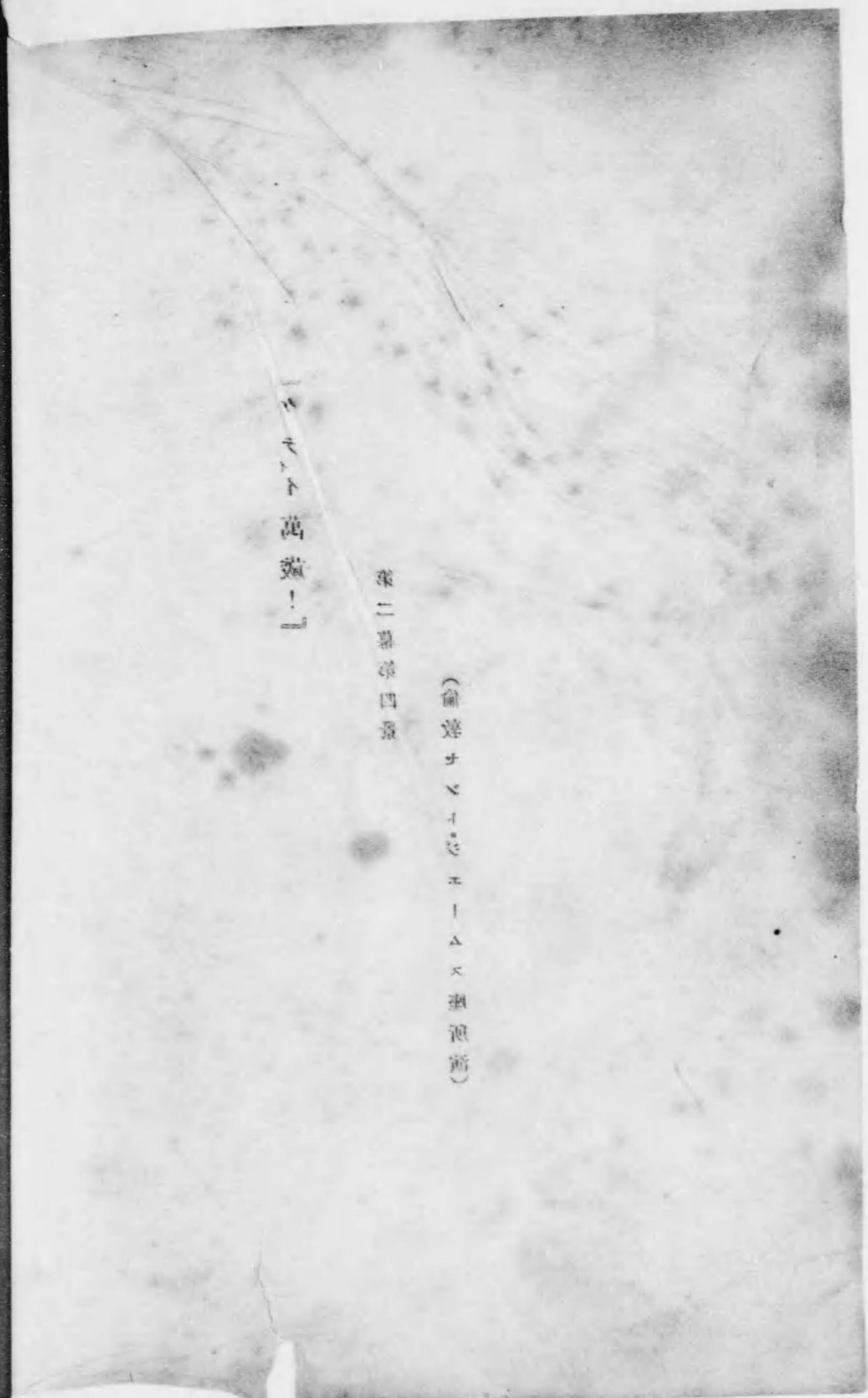
「ケティイ萬歳！」

第二幕第四景

(倫敦セント・ジエームス座所演)



THE
LONDON
STATIONERS
COMPANY



「サトウ 萬歳！」

第二幕第四景

(倫敦サトウ・イ・ミエー・ムス・製菓所)

をかける)。

一同驚いて叫ぶ 如何して——何だつてバンドを!

ウエアル 四つの色のあるザクソ・ホルツセの絹バンド。ケティイ、立派にそれをかけてくれ。Tusch! (ちあ、萬歳を)。

音楽 (喇叭を吹奏す。)

ザクソ・ホルツセ學生組合 Bravo! Bravo! (5よろ〜)。

デトレーヴ さあ、ケティイ。サキソニアもザクソ・ホルツセに好意を表する。

諸君、サキソニアも亦諸君の好例に倣ひます。(ケティイにバンドを與へる)。立派にそれをかけてくれ、ケティイ。萬歳! 音楽。

音楽 (喇叭を吹奏す。)

ザクセン學生組合 Bravo! Bravo! (ケティイの周圍に集まり、その手を握る)。

第一のシエワアベ學生 シエワアベのバンドだ、ケティイ。(バンドをケティイに與へる)。
第一のファンダル學生(自分のバンドをケティイに與へる)。赤と金だ、ケティイ。

第一のレナーネ學生(自分のリボンなケティイに與へて) ケティイ、ラインのバンドだ。

一同(歡呼し、哄笑す、物の音、音楽)。

デトレーヴ ケティイ。僕に接吻してくれ。

ケティイ(抵抗して) いけませんよ。

デトレーヴ 此接吻はチロルのため、この接吻はハイデルベルヒのためだ。(ケティイに接吻する)。

一同 Bayvo!

アトレーヴ(ケティイを捉へ、一同肩上げをする)。ケティイ萬歲。Hoch! (萬歲)

一同 Hoch!!! (萬歲)。

ウエデル(麥酒の杯をケティイに渡す)。呑め、ケティイ。

ケティイ(笑つて、高くさ上げ) 皆さんは親切ね。あなた方の健康を祝します。

デトレーヴ まあ陽氣にやれ、小供たち。時は五月、われは若い、而してこ

ゝはハイデルベルヒだ。(ケティイを肩にかつぎ出す)。

一同(まはりに集まり) ケティイ萬歲! — Hoch — ケティイ! ケティイ乾杯!

第六景

ルッツとシエーラアマンと残る。

ルッツ(理解しかねて) 如——如何しようといふんだ?

シエーラアマン(まごついて) ルッツさま、私にも分りません。

ルッツ あいつ等はまるで野蠻人だ、汝、あの娘を見たか。

シエーラアマン はい見ました、ルッツさま。

ルツツ 言語道断だ！ この家では人間の生命も安全ではないらしい。われ
くの荷物をまた持出さなけりやいかん——それでない——えい——。
(額をこする)。殿下は今晚はホテルへ御泊りにならなけりやならん。而して明
日は新しいところを探して見るんだ。いや左様したところで大してい
事が無いかも知れない。一體此町が殿下の御出でになるには、適當な場所
では無し。

シェーラアマン ルツツさあ、お氣を御静め遊ばして。

ルツツ けふは終日いやな心地ばかりして居た。こんな恐ろしい目に逢つた事
はなし。

シェーラアマン(まごついて) 何かあつたのでございませうか。ルツツさま。如何し
たのでございませう。

ルツツ われくは今朝早く、九時にカアルスブルヒから立つたのだ。町々は
見物人で一杯で、見慣れないものは停車場から追出されるといふ騒ぎだ。
大公殿下には忝けなくもわざ／＼停車場まで御見送り遊ばされ、百官悉く
列なつた、式部長も、侍従長閣下も、國務卿フォン・ギエゼブレヒト閣下
も、總裁フォン・エルゲンズ閣下も、大將ラツハナア閣下も、其他いろい
ろな閣下かたも御出でになつた。やがて汽車が来て、殿下とユットナア博
士とが、買切の室へ入つて、わしも自分の室へ入つた。と、汽車が立つた。
シェーラアマン 立ちましたかな！
ルツツ うむ、立つた。それから三時間立つと、汽車はベブラで止まつた。わ
しは自分の室から下りて、殿下の室に近づいた。わしは戸を開けて、如斯
申し上げた。『殿下、何ぞ御用はございませうか』。(聲をふるはせて) すると彼

博士の畜生前へかじみやがつて、かう云やあがつた——かう云やあがつた。『こつちは構はずに、自分の室に居るがよい。殿下は人目にかゝらん様に御旅行なされたいのだ』。これでは誰だつて、おれがあ野郎の家來だと思はふぢやないか！

シエトラアマン(返事に困つて) あい！

ルツッ われ／＼は四時にフランクフルトへ着いた。わしはセルツア炭酸水を一本買はふと思つて、食堂へ入つて行くと、殿下が腰をかけて御居てになる。

シエトラアマン(吃驚して) 何處にてございます。

ルツッ 食堂にさ！ あ博士の側で！ 殿下は麥酒を呑んで御居てになった。手袋もおはめにならん御手でもつて、汚ない紙に包んだ、あのフランクフルト。

ルド、ソレセトデといふ奴を御掴みになつて！

シエトラアマン あい！

ルツッ その紙の中から召上つて御居てになつてるんだ。

シエトラアマン(全然まごついて)なる程！

ルツッ そこでは人が大勢あつちへ行つたり、こつちへ行つたり、殿下の御椅子へ肘をついたり、殿下と同じ食卓にすむつたり、不作法な騒ぎ方をしたりして居る——其中で博士め、こんな事を云やがあつた。『給仕人、もう一杯もつて来い！』つて。

第七景

ケタイイ(兩手に空のコップを一杯にもち、舞臺を横らんとす。かくて笑ひながら、振返りて、舞臺の

奥なる學生に叫ぶ。我慢なさい！ 順々にもつてきますよ。何ですつて？
（奥ながら答へる。）えい、直ですよ！ （ルツの側を通らんとして止まる。）
まだあの人は来ないの。王子さまは。

シエーラアマン まだ御出にならない。

ケティイ あの人が来たら呼んで頂戴。わたし家へ行つて来ますから。このコップを置いたら、直に歸つて来るの。あの人が来たら、わたし詩を讀まなきゃならないの。（ルツの食卓に空のコップをおき、自分もかける。）王子さまは綺麗な人？ よつほど上品な人？ とにかく二階の室は、清潔でしやれてるわ。階段はわたし旗で飾り立てたの。あなた、麥酒がよくつて、葡萄酒がよくつて、わたしもつて来るわ。

學生たち（舞臺の蔭より叫ぶ）。ケティイ！

ケティイ 今直に行きますよ。（ルツの食卓に肘をつく。）わたし眞實の王子さまのもの、生れてからまだ見た事がないの。でも、わたし維也納で天子様を見た事があるわ。それ綺麗な顔をしてるわ！

ルツ（とげくしく）どこの天子だ？

ケティイ フランツェルの。わたしはね、リンツの生れなの。こゝからはそれ

あ遠いわ。

一同呼ぶ ケティイ！

ケティイ はい！ はい！ はい！！ あの人は丈が高くつて？ 眼は碧くつて？

わたし彼人がどんな容子をしてるか、まるで考へもつかないわ。

ルツ 頼い奴だ！

シエーラアマン（慌しく立上り）殿下です！ （馬車の音聞える。）

ルツツ どこに？

ケティイ マリヤさま、ヨーゼフさま。

シエーラアマン 殿下が歩いてになります。

ルツツ コップをもつて行け。

ケティイ あら、わたし前掛をかけてるの！ 誰か前掛を取つて頂戴な！ (戸

内へとびこぎ)。王子さまだよ！ 王子さまだよ！

ルツツ 片側へよつて、シエーラアマン、さうだ—— (兩人帽子を取つて立つ)。

第八景

リユウダア、其妻、其叔母(入来る)。

リユウダア どこに？

ルツツ 退れ！

ケティイ わたしに花環を頂戴。そしてわたし詩をよむの。最初は何とかいふ

んだつけ。

リユウダア あの人は何處に居るんだ。

ルツツ(あらしくしく) 退れ！ (ケティイに) 片側へよつて居ろ。(間。一同待ちうけたがら

立つ)。

ケティイ あの人が左様な、左側の。まあ綺麗だ事ねえ！

第九景

公儲カアル・ハインリッヒ。博士。(入来る)。

博士 ルツツが居ります。

ルツ 殿下。

公儲 (一同に對し、軽く擧手の禮をする。公儲は少しく齒にかめる様子なり。)

博士 あれがネッカア河でございます。殿下あれが、御城で、有名な場所なの

でございます。

公儲 なか／＼好い處だね。

ルツ 失禮ながら、殿下、この家は――

博士 (ルツを推遣つて) そこでこの娘は―― (笑ひながら) 花環をもつてるな!

クタイイ (詩を読む)

「遠き國よりはる／＼と、

ネッカアの河邊に住むべく、

こゝに來ませし公子の君に、

香はしき春の花もてつくれる、

花東をさげまつる。

さあ、樂くこゝに入らせ給へ。

かくて再びこゝを立去り給はん時、

君に忠實を忘れざりける、

ハイデルベルヒ學生時代の、

身の幸福を想ひしのび給へ。」

さあ、之を取つて下さいな。(敬禮して、花環を公儲に渡す。)

公儲 (齒に噛みて、稍堅くなりて)。有難う! (花環に手をかける。)

クタイイ さあ、取つて下さいな。

博士 Bravo! (よろ／＼)。なか／＼美事に出來た。名は何といふな、娘さん。

ケティイ(敬禮して) ケティイつて云ひます。

公備(尙齒に噛みながら) 有難う!

ルツツ 失禮ではございますが、殿下、わたくしは殿下の御注意を願ひたいと

博士(ルツツを、側におしやつて) それから、之が亭主か。

リユウダア 此ハイデルブルヒでは、手前程名譽なもの有あしません。手前は
ヨ一ゼフ・リユウダアと申しましてな、これが手前の女房でござえます。
濟ませんが、一つ王子さまに室を見ていたゞきてえもんで――

公備(首肯きて、後よりつゞかんとす)。

ルツツ 殿下に御注意を御願ひをします。この家はどの點から申しまして、
殿下の御住居には不適當でございます。

公備(足をとゞめ) 如何不適當なのか。

博士(粗暴に) 何を云つてるんだ。

ルツツ 殿下、室はいづれも古風で、階段は眞暗で、それに外觀が如何にも下
等て貧乏くたうございまして。

博士 何の、馬鹿な!

ルツツ 何?

博士 馬鹿な事ばかり云つてる。この町には宮殿はありはしないよ、有難い事
には!

ケティイ(情なげに、半ば聲高に)。彼人はこゝには居て下さらないでせうね。

ルツツ(おのが心を強く抑へて)。特別に殿下の御注意を願ひたいのは、此家の階下は
酒屋に使用されて居る事でございます。學生や、其他あらゆる種類の人間

どもの集合所になつて居りますので。で、兎も角今日のところ、ホテルへ御室を取ります様、殿下よりも御命令が願はしいのでございます。左様致しますれば、わたくしは即刻ホテルの方へ御荷物を運びますてございませう。

公儲(決しかねて) 若し汝がその様にいふのなら——
ケティイ(一歩すゝみ出して、哀訴する如く) いけません!

博士(笑つて) 兎に角殿下が御自身で御検閲の上、御決めになるがよからうと思ひます。

公儲(はつきりと) 左様しよう!
リユウダア 御免下せませまし。

音楽手、又 “Gandemus” 『人生の喜び』の曲を奏し、學生歌ふ。

公儲(聞きながら立上り) あれは何か。

ルツツ 殿下、學生でございます。庭中學生で一杯でございます。

公儲(第一節の間黙然として耳を傾く。一同立ちながら、公儲の決心のつくを心待ちにまつ)。博士。

博士 殿下、なにか?

公儲 行つて見やう。(退場、一同これにつづく)。

博士ひとり残りて耳を傾け居りしが、やがて太儀らしく腰かくる。日くれかゝる。古城は一面に夕日の光を浴ひる。暮色徐ろに近づく。

博士 Gandemus! 人生の悦び! そしてわしは——わしは疲れ切つて、弱つてしまつた——弱つてしまつた!

ケタイイ（入来り、博士にさわる）。あの人は、もうこゝに居る事になつたの。

博士（笑ひながら）わしは知らん。

ケタイイ 是非居てもらひたいわ。

博士 是非居てもらひたい？ 兎に角葡萄酒を一壇もつておいて、娘さん。バ

デツシエンだよ。極上等の奴を。一緒にのみながら、その相談をしやう。

分つたかね。

ケタイイ えい。

博士 極上等の奴だよ！

ケタイイ 飛切り上等の！ （駈け出して退場す）。

博士（一人になり）。神さま！ わたしの熱心な祈禱を御聞下さい。このハイデル

ベルヒで、病身な老ぼれた學校教師の身體を、尙一度健康に御直し下さい。

わたしはもう葡萄酒を呑むまい、麥酒も呑むまい。尙一度人間らしくなれるものなら、半日は運動計りして過すとしやう。あゝ神さま！ わたしは疲れ切つてる——疲れ切つてる！

第十一景

公儲 博士！

博士（答へなし、眠り居る）。

公儲（博士に） 博士！

博士 何——何だつて？

公儲 わたしたちはこゝに居る事にしやう、博士。

博士 何處に？

公儲(博士をゆすぶり)。こゝにさ！もう眠つてはいけないう。まあ御覽、庭中學生で一杯だ。二階の窓からは、眞直にあの連中が見おろせるんだ。さあ、一緒に二階へ行つて見やう、すぐわたしの窓の下に見えるんだ。

博士(尙眠げに)。成程、成程——

公儲 向ふにネツカア河がながれて居る。而して學生連は、垣にずっと支那提灯を吊下げた。博士、さあ汝も行つて見るがい。

博士 わたしどもは、もうこゝに居る事になつたのですか。

公儲 もうすつかり決定してしまつたのだ。

博士(欠伸して) あゝわたしは何だつてこんなに疲れてしまつたのだらう、あの汽車の旅ぐらゐて！

公儲 博士、汝はその旅行の半分は眠つて居たのだよ。

博士 左様でございましたかな。全く怠になる程眠くてたまらないのです。一體どつちかといふと、わたしは眠れない方なのですが。併し自分の目を開けて居る事が出来なかつた日には、如何にもしやうがありませんからなあ。(欠伸をする)。

公儲(なだめるやうに)。さあ、博士。二人で一杯やるとしやう。而して明日の朝までこゝに居るとしやう。が、博士、眠つちやいけないよ。こんな晩には誰だつて眠るべきものではない。

博士 あの娘は何をして居るんだらう。葡萄酒をもつて来る筈なんだが。あなたは今日フランクフルトで御覽になつた娘たちの事を覚えて居らつしやいますか。あの娘たちもあれでまた一種類なんです。ラインやマインの連中、われ／＼とはまるで違つた種類なんです。あなたはまだ娘といふもの

を御存じがない。そんな事で怒つてはいけません。なあに、直にすつかり分つて来ます！（目を閉ぢる）。

公儲（博士を衝く）。博士！

博士（目をさまし）。えい、えい。講義。勿論です。明日の朝早く。大公殿下が昨日仰せられた通り、「公儲殿下が大學で御経過になる一年間は、十分學問の修養を主として、遊樂に耽る様な事のないやうに注意しなければならん」です。遊樂に耽らずに、遊樂にふけらずに！

公儲（博士を推して）。そんな事は如何でもいぢやないか。まあ、汝は如何してそんなに眠いんだ！

博士 何ですつて？（四圍を見る）。さうです、あれがネツカア河です。あれはシユワアベ、ロイトリンゲン、それからあのゲツツを通つて流れて来るん

です。カアル・ハインツ。ネツカア河で美しい酒を呑む。あゝ美しい酒を。（また眠りに落ちてしまふ）。

公儲（彼を揺ぶり）。博士——（愁ひを帯びて）——私も彼處へ行つて見たい！あの連中と一緒になつて見たい！みんなと一緒に！

第十二景

ケティイ もう直に日が暮れるわ。ランプをもつて来ませう。さあ、葡萄酒をもつて来ましたよ。あらまあ！此人は眠つてるのね。

公儲 うむ。

ケティイ 布團をもつて来ませうか。

公儲 いや、必要はないよ。

ケティイ (酒をつぎて) さあ、御上がんなさいな。

公儲 有難う、どうも。

ケティイ あなた好さう。

公儲 えい、有難う。

(短かき間。)

ケティイ 今日(けふ)はあついことね。

公儲 うむ。

ケティイ ——あなた、前にハイデルベルヒへ来た事(こと)があつて。

公儲 いゝや。

ケティイ チュービンケンへは行つた事(こと)があるてせう。

公儲 いゝや、行つた事(こと)は無い。

ケティイ フオン・シエーフェルさんは、今(いま)ハイデルベルヒへ来て居(ゐ)るんですがね、今(こんど)度の週間(しゅうかん)には、炬火(たいまつ)行列(ぎやうれつ)をするんですつて。

公儲 うむ!

ケティイ ほんとうですわ。(少し間(ま)を置いて、獨語(ひとりごと)。)矢張(やっはり)王子(わうじ)さまだわ、どんなに

詰(つま)らないだらう。——(公儲(こうぞ)に向(む)ひ)——。此(この)葡萄酒(ぶどうしゆ)は如何(どう)。

公儲 (呑(の)んで) 大變(たいへん)美味(おい)しい。

ケティイ 今年(ことし)は酒(さけ)が高(たか)いんですよ。——でも、そんな事(こと)は、王子(わうじ)さまなんぞにはおんなじ事(こと)ですわね。

公儲 何(なん)の話(はなし)なの。

ケティイ あのね、酒(さけ)なんぞ高(たか)くなつたつて、王子(わうじ)さまには格別(かくべつ)かはりがないつて話(はなし)なの。

公儲 あゝ！ 左様！

ケティイ ——あなた、兄弟があつて。

公儲 何があるかつて。

ケティイ(じれつたさうに) 矢張あなた見た様な王子さんの兄弟があつて。

公儲 ない。

ケティイ ぢやあ妹は。

公儲 ない。

ケティイ(急いで) でも、御両親はあるんでせう。

公儲 もう死んでしまつた。

ケティイ まあ、御氣の毒だわね！ 御氣の毒だわね！ わたしにも両親はな

いの。

公儲 あゝ！

ケティイ カアルスブルヒに居る大公さまね——あの人はあなたの阿父さんぢ

やないの。

公儲 あの人は叔父さんなの。

ケティイ あなたの叔父さん。(問) わたしはね、こゝから大變に遠い、埃太利

て生れたの。でも、わたしいつまでもハイデルブルヒに居たいと思つて

の、全くいゝとこですわ。(酒を注ぐ) さあ、御呑みなさいな。

公儲 有難う。

ケティイ わたしの讀んだ詩ね——あれ、あなた好いと思つて。

公儲(笑つて) うむ。大變さもしろかつた。

ケティイ わたしは毫もいゝと思はないの。

公儲 何故さ。

ケティイ わたしは最初には暗でなんか覺えたかなかつたの。でも、叔父さんと叔母さんが、左様しろつていふんですもの。あなたが入つて來た時にね、あんな風で無かつたら、わたし花環は上げたか知れないけれど、詩は讀まなかつたてせうよ。

公儲(立上り) わしは如何見えればよかつたのかね。

ケティイ 如何見えれば——え——わたし知らないわ。

公儲 ケティイさん、わたしは如何したらあんな風でなく見えるだらう。(ケティイを物やさしくおのが方に引寄す)。

ケティイ あら、いけません、そんな事をしては。

公儲 ケティイ!

ケティイ(怒らぬばかりに、身をふり釋き)。いけません、いけません! もうそんな事をしてはいけません。わたしはね、婚約がしてあるの、而してもう彼是一年ほどになるの。

公儲(まごついて、恥かしげに)。勘忍して下さい。わしは——わしは——勘忍して下さる。

ケティイ でも、わたしは約束したばかりなの。フランツェルはまだ餘程待たなきや、婚禮は出來ないの。あの人は急いでるの。でもわたし忌なの。わたしの話つ振は塊 太利の人見たやう?

公儲(までついて) 塊 太利の人のやう?

ケティイ わたしあんな人たちの話つぶりは忘れてしまひたいの。わたし大嫌ひなの。でもフランツェルは好なの。あの人は維也納の生れなんですもの

公儲なる程。

ケティイ あなた、あの人はハイデルベルヒに住んでるんだと思つて。

公儲(まご)ついで) うむ——わしは左様思つたの。

ケティイ フランツェルは生れてから一度も維也納の外へは出た事がないの、
匈牙利の外には。それあ變な人よ。あなたあの人の職業を知つて、伯樂
なの。

公儲 何だつて。

ケティイ あの人は馬車の馬を買ふの。あの人はそれが大變によく解るの。そ
れあどつさりお金をもうけるの。而してレオポルドの町に家が三軒もある
の。この間匈牙利から灰色の馬を二頭もつて来たかと思つたら、間もなく
ね、(力を入れて)ニッキイ・エステルハジイさんがそれを買つてしまつたの

公儲 しかし——

ケティイ まあ、御覽なさい、これがフランツェルなの。(横を向きながら、胸衣から
繪を取り出し) 兎に角綺麗な男ぶりてせう。でも身體中で鬚が一番好いとこ
ぢやなくつて、えい。

公儲 ふむ!

ケティイ でも、わたし、あの人の事なんか、あんまり氣にしないの。

公儲 氣にしない?

ケティイ だつて、一番いやなのは、あの人はわたしの阿父さんになれさうな
程、年齢を取つてるんですもの。それから、二番目にはね、わたし維也納
へなんか行きたくないんですもの。

公儲 ほんとうに行きたくないのか。

ケティイ　でも、それには理由があるの。リュウダア叔母さんの兄弟が、フランツェルの阿父さんの妹なの。而してわたしの死つた阿母さんが、フランツェルの阿父さんの妹なの。而してわたしが極小さい時に、みんなが能く左様云つたんですつて。わたしは何でもフランツェルと婚禮するんだつて。あの人はこの前の約翰さまの御祭の時に、わたしの許へ手紙をよこして、婚禮してくれるか如何かつて尋ねて來たの。左様したらみんなは「是非しなくちやいけない」つて云ふんでせう。だからわたしも「しませう」つて云つたの。でも、わたし尙爲ないの。わたししばらく待つてもらひたいの。

公儲　あゝ、左様！

ケティイ(太息をつき)　誰だつていつか一度は婚禮しなけりやならないんでせう。

だれだつて何時までもハイデルベルヒに居るわけには行きませんわ——

公儲　無論いかないね。

ケティイ　もうわたし行かなきゃならないわ。

公儲　ケティイ。(ケティイを引寄せらる)。

ケティイ　いけません。

公儲　可愛いケティイ！(やさしく接吻する)。

ケティイ(半ば身をふりほどきながら)　あなたの名は何といふの。

公儲　わたしの名？　カアル・ハインリッヒと云ふのさ。

ケティイ　名が二つあるのね。

公儲　左様。

ケティイ　カアル・ハインリッヒ——妙な名だことね——随分妙なことね——

(やさしく公儲の手をとり)　カアル・ハインリッヒ。(立上り)　だれが來ますよ。

公儲 行つちやあいけない。

ケティイ わたし、また歸つて来るわ。

公儲 きつと歸つて来るか。

ケティイ 屹度だわ。(退場)

第十三景

デトレューヴ(入来る)。後にケラアマン。

デトレューヴ 新入生！ 新入生！ 小供たち、支那提灯を吊してくれ、もう真

暗だ。(手探りしつゝ入来る)。これぢやあ、誰か首をくじくかも知れないぞ——

(ランプを取り、公儲の顔を見る)。誰だい、やあ、これあ失敬。

公儲(驚いて)。どうぞ——

デトレューヴ 僕あ、クルト・エンゲルブレヒトだと思つたんだ。失敬々々。

公儲 あゝ！

デトレューヴ(燈光ですかして見て) 君あ、學生ぢやあないのかね——一期生だね——

けふ新しく着いたのかね。

公儲 その通り。

デトレューヴ(呼ぶ)。ケラアマン、麥酒をもつて来い！

ケラアマン 畏まりました。伯爵さま！(麥酒を二杯持ち来る)。

デトレューヴ 人に邪魔をされない様にして、僕は此紳士としづかに麥酒を呑み

たいんだ。(自から紹介する)。僕はサキソニアの伯爵フォン・アステルベルヒ

といひます。君、幸運は君をこゝへ連れて来たんだ。(博士に燈光を向け)。これ

あ誰だえ、此老紳士は眠つて居るね！ 一つ起してやらうぢやないか、え

し。

公儲(返事にまごつき笑ふ)。

デトレューヴ 君、ハイデルベルヒでは、われ／＼はどんな事でも我慢をする事になつてゐるんだ。一人ぼつちて居ることの外は、かう云ふ歌があるんだ。

『あゝハイデルベルヒ、爾譽たかき美しの町よ——ライン、ネツカアの河岸には、匹敵すべき町もなし！———楽しき友どちの町、知識ふかき酒の町』———どうだ、君も同意かね。

公儲 同意です。

デトレューヴ 此詩人は殊さら「たのしき友どちの町」と云つて、『楽しき友の町』とは云つてない。若し一人の友といつたら、無意味にして且非論理的ぢやないか。さあ、乾杯をやらう！

公儲(コップを打つて) 君の健康も祝さう！

デトレューヴ(公儲がコップを食卓の上に置き、コップの蓋を閉ぢざるを見て驚く。デトレューヴは蓋をとぎし)

君、ハイデルベルヒの人間になつても、一日だけは、學生帽もかぶらず、バンドも着けずに居ていゝが、併しそれはたつた一日だよ。ハイデルベルヒの美とは何ぞやだ。曰く、バンドに、學生帽に、友人に、決闘の劔ぢやないか、えい。

公儲(太息をつき) なるほど。

デトレューヴ 僕は失敬だが、君の健康を祝して、このコップの残りをのむとしやう。(呼ぶ)。ケラアマン！

ケラアマン(新しく酒をもち来る)。

公儲 君の健康を祝す！

アトレーヴ この老紳士は麩をかいてる。えらい音をたてゝる。これあ誰だね。
公儲 この紳士はわたしと一緒の人です。

デトレーヴ(博士の顔へ燈光をつきつけて) この人はなか／＼好い顔をして居る。生々
とした老少年だ、えい。

公儲 あい、さう！

アトレーヴ 名譽會員といふものは組合には入つて居らんが、われ／＼と一緒
に酒をのむことだけは許してある。そこで、君、君もサキソニア組合へは
いつてその旗をもつ事にしてもいいだらう!? もう左様極めやうぢやない
か。

公儲 わたしには——わたしには出来ません！

デトレーヴ なにが——出来——ないといふのさ。新入生はみんなそんな事を

いふ。君の様な小供たちは、老婆さんや女たちに聞かせられた饒舌で、頭が
一杯になつてるんだ。が、有難いことには、Alma Mater (母校)へ来るの
は、みんなもう自由意思の人間なんだ。

公儲 わたしはそんな——

アトレーヴ まあ、僕のいふことを聞き給へ。ね。人間はたゞ一人て生活する
事が出来んといふのは、知れ切つた事實だ。友人のない人間は、ぢきに憐
れな身の上になる。一つ釣瓶もしばらくは井へ入れるが、しかししまひに
は毀れてしまふ。

公儲 わたしは何時でも單獨です。

デトレーヴ 何故さ?

公儲 わたしは何時でも單獨で居るのです。

デトレューヴ 君、僕にはそれが如何も分らないんだ。われ／＼はお互ひに解つて居ない。僕はハイデルベルヒ中を荒まはつて、新入生に決闘を吹かけてあるく人間の一人では無い。自分の我儘を云つた日には、一打の中で、僕の決闘の出来る人は一人しかない位なものだからな。さあ、握手をしやう、君。君も僕等の仲間になるだらう。

公儲 わたしは左様はいきません。

音楽手 “Ergo bibamus” (“いざ、相共に酌まん”) を奏し、學生等之をうたふ。歌は距離の爲めにいと物やさしくなりながら、夜氣をとをしてひびく。

デトレューヴ ハロー！ やあ、奴等は歌をうたつて居る。君はあの歌を知つてるか。

公儲 いいや。

デトレューヴ 無論君は知らないさ。誰も知らん。あの歌の作者は昔のフォン・ギョウデなんだ。君は一體獨逸人が何處で詩を學ぶか知つてるかね、え、君、僕等のところだ。獨逸の大學だ。

『おのが住む今の世に何をかいはひ、

たじうたはひ、Ergo bibamus.』

そはよのつねのものならて、

常へによろこびを興ふ、bibamus.

そは家々に友をあつめ、

雲を輝かせ、花を咲かしめ、

美しの幻をあらはす。

さあや杯を相觸れ、さてうたへ、bibamus.』

さあ、君、君の健康を祝さう！ God save the King! (神よわが王をすくひ
たまへ!) 友情萬歳!

公儲 友情萬歳!

デトレーヴ(雷の如き聲にて呼び立てる) サキソニア! さあ、みんな此處へ来い!
ケラアマン! 新入生! 學生帽をもつて来い! (一人の頭より學生帽を取り、そ
れを公儲にかぶせる)。さうだ!

第十四景

サキソニア組合の學生一同入来る。

エンゲルブレヒト 何がはじまつたのだ。

デトレーヴ おい、小供たち、また新入生が一人出来た。たちは悪くはなさ

うだ。

ピルツ 何處に?

デトレーヴ これが即ち新入生に、決闘をふつかけるといふ奴さ、カアル、夜
の十一時に、酒をのんでる時に。

ピルツ(慇懃に公儲の手を握る)。 僕は實に愉快だ——

デトレーヴ(博士を揺うごかして) こゝにも一人居る。この男は眠つてるんだ。恐ろ
しい駢をかく名譽會員だ!

博士(目をさまし)。 なにが初まつたのだ。

デトレーヴ 失敬ですが僕は、此連中を御二人に紹介したいものです。え——
え——(考へて)。 僕はすつかり名を忘れてしまつた。

一同(しばらく待つ、いづれもまごついて默然)。

デトレーヴ 何とかいふ——名でしたな。

公儲 わたしはザクセン・カアルスブルヒの公太子です。

一同驚いて後へ退る。

デトレーヴ なに？——だれだつて？——これは大變だ！。

博士 何があつ初まつたのです、殿下!? 學生帽を被つて。まあ、何といふとです。

公儲 博士——

博士 何て馬鹿ないたづらだ、殿下。どんな事をやつてもいいが、これだけは否かん。これがカアルスブルヒであつて御覽なさい。わたしは絞罪台て首を絞められてしまふ。首の骨を挫かれてしまふ。

第十五景

ケティイ(入來る)。

デトレーヴ ケティイ、こゝへおいて。ケティイは一番はじめに祝辭を申上げなけりやならない。(ケティイを紹介する)。ケティイ、これがザクセン・カアルスブルヒの公太子殿下だ。

ケティイ(陽氣に笑ひ) あゝ、わたしもう知つてるの。この人はカアル・ハイニンリツヒつていふの。

博士(獨語の如く) 誰だつて。

ケティイ(笑つて) カアル・ハイニンリツヒよ。

博士 これはまた餘りだ、これは——(獨語の如く)——これは如何したものだ。

音楽手五月の歌を奏す。

デトレーヴ 五月は来た、諸君。

博士 誰が来たつて。

公儲(ケティイの手を取つて) 五月は来た。

一同(博士をとりまく)。

博士(獨語の如く) わたしはもうザクセンの勳章は貰へさうもない。



リニウダアの家の公儲が室。古風なるフランク式にかざられたる室内は、過去の市民の優美の飾をしのばしむ。壁には「法羅と聖母」などの繪あり、その側には二十五錢額縁に入りたる學生の小さな寫眞潭山にかけある。ピアノと、瀬戸物を入れたる硝子戸をはめたる道具棚。決闘の劍、紋章、試合の繪などよき處に飾りある。時は朝の五時、朝日はハイデルベルヒを透し見らるゝ窓にかゞやく、一つの窓の前にはいろ／＼の色の日覆ひあり。他の窓は開かる。雀外面にて囀る。

第一景

ルツツたゞ一人、臂かけ椅子に依りて眠る。舞臺はその儘にて數分つゞく、時計臺にて五時をうつ。

ルツツ(飛上り) あれは何だ。如何して——(眠さうにまは

りを見、驚く。あゝ！（柱時計を見る）五時だ！ 情ない！ また五時だ！ また
一晩夜明かしてしまつた！ 癢にさわる雀だ！（窓より石をなげる、雀消ゆる）。
あゝ死ぬほどまゐつてしまつた。一時に目をさましたか、無論殿下は歸つ
ておいてならん。それからあとは二時と四時に、また目をさました。こ
れがもう幾月となくつゞいて居る！——一週間に二度——三度もあるんだ
からな！ おれの腕は如何したといふんだらう。動かせなくなつた！（腹
たしげに、窓を見て）いやな町だ！ おれはもう直にいけなくなつてしまふ
——（誰か戸をたたく）。誰だえ、そこへ来たのは。

第二景

叔母のデルフェル（刷毛と、手桶と、大だはしをもつて入来る）。入つても好うございます

か。

ルツツ 何か用があるのかね。

叔母 ルツツさまはもう御目さめてございますか。

ルツツ（興奮に）。起きてるよ。わしは一番さきに床へ入つて、一番あとで起るん
だ。いや、それよりか、床へ入つた事もなければ、床から出た事もないと云
つた方がよささうだ。（頭をたゞいて見て）。何を云つてるか譯が分らない。頭
は空虚になつてる。

叔母 ルツツさまは、もつとお眠みなさならなければいけませんね！

ルツツ わしは眠んだ事なんぞあるものか。わしは人間らしい生活をして居る

ものか。わしはリニウマチのために苦められて、毎晩風邪をひいてるんだ。

叔母（床を洗つたり、たゞいたり、刷毛をかけたります）。あなた、夕餐に手をおつけになり

ませんでしたね!

ルツツ バタをつけたバンが二つ片と、それから麥酒が一壺切りだ! カアル
スブルヒに居る時に、こんな晚餐をもつて来る奴があつたら、わしは窓か
ら抛り出してしまふんだ!

叔母 わたしは何時も云ひ暮らして居るんでございますよ。ルツツさまほど、
お氣の毒な方はありませんで。

ルツツ カアルスブルヒに居る時は、わしは毎晩上等の古いボルドーの葡萄酒
を一杯のんで、十時に床へはいるんだ。而して朝早く牛肉汁を吞んで、正
午には鶏を食ふんだ。(突然語を切つて)。この連中は、わしがどんな人間か
知つてるのかね。

叔母 あらまあ!

ルツツ わしは從僕ぢやあないんだよ。分つたかい。わしは舍人ぢやあないん
だよ。式部官の義務と權利は、他の官職と同様、立派に規定されてるん
だ! たとへていへば、舍人は職工で、式部官は美術家だ。分つたかね。

叔母 左様でございませうつて、左様でございませうつて。

ルツツ 一體不都合なのは、あの男——あの學校教師の奴なのだ。日がな一日、
『ルツツ、珈琲をもつて来い』とか、『ルツツ、刷毛をとつてくれ』とか、『ル
ツツ、葉巻煙草をくれ』とかぬかしやあがる。此次には『靴をみがけ』と
来るだらう。いつその事、彼奴左様云やあがれば好いんだ! 左様すれば
一番大喧嘩をしてやるんだ!

叔母 なるほど、成程。

ルツツ デルフェル叔母さん、わしの様な地位に居るものに、一番いけない事

といふのはね、禮儀作法を忘れるやうになる事だ。禮儀作法なんてものは其人の地位なり教育なりで決てしまつて、もう其人間の義務見た様になつてゐるものなんだからね。わしは折々臺處へ行つて、汝や、他の女中たちなどと一緒に珈琲を飲む様な事がある。これといふのも、わしだつて稀には愚痴もならべたいからだ。わしは明けても暮れても、ひとりぼつちで居る事は出来ない。わしはとうとう自重心を失つてしまつた。

叔母 左様でせうつて、左様でしやうつて。

ルツツ あつちへ御出で。わしは半時間ばかり眠らうと思ふんだ。

叔母 ケティイは向ふに居ります、珈琲をこさへて。どうです、一杯めし上りませんか。

ルツツ 呑まん。

叔母 手桶その他のものを集める。稍長き間の後、立ち去る。

ルツツ 眠らう、眠らう！ (驚いて、飛上る) あれは何だ。

家の外、階下の方より、馬車の軋る物音、鞭をならす音、笑ひ聲、人の聲、「ルツツ！ Heda (おいしく)、ルツツ」といふ公儲の叫び聲、次第に近く聞ゆ——やがて家の戸をたたく音。

ルツツ はい！ ただ今！

公儲 (舞臺の外にて) ルツツ、戸をお明け！

ルツツ (窓より) はい、殿下。

博士 ルツツ、戸の鍵を！

第三景

ケティイ (入り来り、窓の方へ飛んで行く) いまあ！

何て騒ぎなの！

(窓に近より、日覆ひ

を引く、旭日さつとあたる。笑ひながら窓より叫ぶ。戸を毀しちやいけませんよ!

公儲(舞臺の外にて) お早う。ケティイ。

ケティイ おまへさん達は一體どなたです! あなたがたも少々は耻を知る
がいゝわ! もう朝の五時ですよ! (じれつたさうに、ルッツにふり向き)。階下

へありて行つて! 戸を開けてやつて下さい! さあ早く!! さあ早く!!

ルッツ(俄かに腹が立つて)『さあ早く』もなにもものだ!!、『さあ早く』もなにも
だ!!

ケティイ(ルッツの手から鍵をとり)無精者ね!(窓に身を屈めて)氣をおつけなさい。わ
たし鍵を投げますよ。さうです、カアル・ハインツ、帽子をさうもつて居
らつしやい。氣をおつけなさい。さうら!(投げる)。

公儲 BRAVO!(545)。

ケティイ わたし直に行きますよ。(急いで公儲の方へ走り去らんとす)。

ルッツ(遮りとめて立つ) 汝はわしを何だとか云つたな。

ケティイ 寝惚頭。(走り去る)。

ルッツ ルッツ、腹を立てゝはならないぞ。

第四景

公儲(外套の襟を立て、ケティイと共に入来る。ついでにデトレイヴ、それよりピルツ、
及び他のサキソニア組合の學生、やがてケラアマン入来る)。

公儲(ケティイに腕をまきつけて)けふは一つ呑みまわらうぢやないか。寝たりなん
かしてはつまらないからな。ケティイ、一緒に出かけやう。

ケティイ さあ! 何て手なの! 土でも堀つて来たやうだわ。

公儲（塵埃だらけの薄色の手套に指し） 僕は四時間といふもの、手綱を執つて馭者臺に居たんだ。（手套を引ぬいて、投つける）おまへも一緒に行きあよかつたんだ。
博士入来る。高朝をいただき、外套の襟を上（た）に立て、ズボンの隠袋に両手をつき込む。絶えず舞臺を右に左に歩き廻る。

デトレーズ「お早う、ルッツ君。」

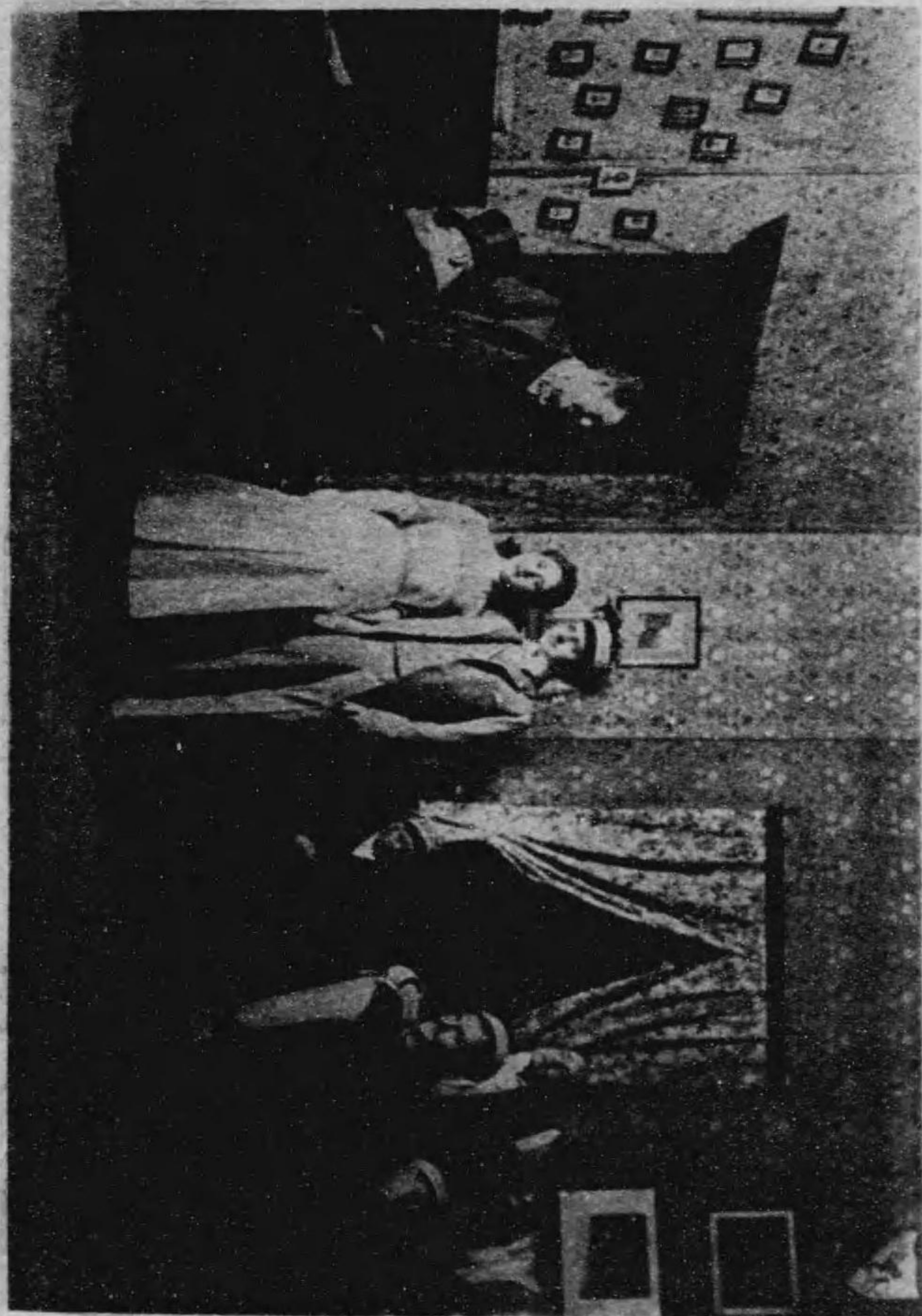
ルッツ 伯爵閣下。

公儲 またこゝへ犬をよこしてはいかんよ、ケラアマン！ 彼奴等は、室の中（た）のものを何（た）から何（た）まで喰ひ裂いてしまふ。お早う、ルッツ。

ルッツ 殿下。

公儲 おまへはよく寝たらう、ルッツ。もう遅いぞ。いや、寧ろ早い方かも知れないな。

欠



欠

ルツツ 寝た、わたしが寝たと仰有るのですか！

公儲 小供たち、どうだ、シユナープス(酒の名)でも呑まうかな。ケティイ、もつておいで。ルツツ、さあ。

博士(ピアノを開き) ルツツ。

ルツツ(拂然として) 何？

博士 こゝへ紙巻煙草をもつておいで。

デトレーヴ 小供たち、こゝにコンヤックがあるし、こゝにコップがある。カ

アル・ハインツ、あなたはどつさりリキユールをもつて居る。(椅子にのぼり本箱より壺を幾本もとり出す) 取つてくれ、ルツツ。

ケティイ 椅子から落ちないやうに氣をつけておやんなさい！ しつかりと抑へて置いておやんなさい。

公備 ルツツ、犬に水をやつてくれ。臺所からもつて来てやつてくれ。
デトレーヴ ルツツ、コツブを。

公備 あい、ケティイ、おまへ、僕たちに珈琲をこしらへてくれ。ルツツ、おまへも手傳つておやり。いや、いつそお城へ珈琲をもつて行かうか。

デトレーヴ ネットカアスタインナツハてますか。

公備(エンゲルブレヒトに) 肥大漢、君は眠つてるんだな。

エンゲルブレヒト カアル・ハインツ、僕は恐ろしく疲れて居るんです。

ケティイ(笑つて) 可哀さうに、肥大漢さん!

博士この間、ピアノにてルコックの歌劇「アンジョー夫人」を奏す。博士の高帽横に傾く。

公備 あい、あい、博士、其へは彈奏は堪らないね。閉めておしまへ。(ピアノの蓋をとぢる)。僕たちは終夜そんな音を聞いて居たんだ、ケティイ。ユーゲ

ンハイムで朝の三時まで踊つて居たんだ。それから馬車の馭車臺に乗つて、村々へは片つぱしから馬車をとめて、酒屋の戸をたたくまはつたのだ。汝も一緒に行きあよかつたな。

博士 あい、だれかわしを寢床へつれて行つてくれ。

一同 博士! 博士は寢床へ行つた方がいゝ。少し寢なくちやいかん。

公備 ルツツ。

ルツツ 殿下。

公備 博士を寢床へ連れておいて。よく氣をつけておやり。

ルツツ 殿下。

公備 どうしたね、老人。餘りやり過ぎたかね、えい。

博士 全くまゐつてしまひました。あなたはわたしを墓場へ連れていらつしや

る。わたしは攝生をおもんじて、健康を回復しやうと思つて、ハイデルベルヒへ來たのです。ところがその代りにだん／＼悪くなつて行く。わたしはもう三年と生きられますまい、いや二年もむづかしい、いや一年だつてだめてせう。わたしは逆も家庭教師の役目はつとまらない——少くともこのハイデルベルヒでは。

公備 さあ、みんな彼方へ御出で、小供たち。博士は寝まなくちやいけない。今は六時だから、僕たちは八時にお城へ出かけやう。今日はうんと飲まう。而して僕はトルコのブンシユをみんなに御馳走してやらう。

一同（賛成する）。

博士 わたしも行かう。

公備（驚いて）。なに？僕たちと出かける。

博士 あなたがたは、わたしが眠つてる中に、トルコのブンシユを飲まうとする！それあ可からう。（椅子から帽子を取る）。だれだ、わたしの帽子の上へ腰をかけたのは。ルツツ。

ルツツ 何です。

博士 わたしの新しい巴里の帽子をもつてゐる。

アトレージュ 博士はひどく思ひ切つて云つてるな。

クティイ あなたはここに居て、眠つた方がいゝわ。

博士 だれ？わたしが？

クティイ えい。

公備 BRAVO! (よろ／＼)。クティイ!

一同 BRAVO! (よろ／＼)。

博士 此娘は如何しろといふのだな。

ケティイ あなたは目を開いて居られないぢやありませんか。

博士 此女のいふ通りだ、小供たち。おまへさんたちは、此わたしを檸檬見たやうに、乾からびるまで搾らふとするのか。おまへさんたちは、此弱り切つた老人の胸に、わづかにのこつてる勇氣の微光を消さうとするのか。わたしはお茶を一杯のんで、寢床へ行かう。

公儲 それがい、博士。汝もとう／＼話に分るやうになつたな。

博士 ルツツ、おい、友たち、おまへの手を借してくれ。ルツツは私の友たちだ。此男はわたしが嫌ひで、わたしが疲れ切つて、靴を脱てくれと云つても、如何しても肯かないが、併し、兎に角この男は人間らしい精神をもつてるよ。

ルツツ (憤然として) 博士!

ビヤツ (自分の手を博士に出して) allons! (行かう)。博士。

博士 いかうが、私を抑へて居てくれ。お休みなさい、カアル・ハインツ。

「飲めよ、飲めよ、瑞典の喇叭のごとく。」(ルツツと共に退場、彼と共に退場する人々は笑ふ。ケティイも共に行く)。

公儲 だれかもう一吸していかないか。(デトレイヴに)。君はこの肥大漢を連れて

て行つてくれ給へ。(エンゲルブレヒトを揺る)。肥大漢!

エンゲルブレヒト え、承知しました。(眠さうに立上る)。

アトレイヴ こいつを一つネツカア河へ水浸しにしてやらう。僕も泳ぎに行くんだから。あい、一緒に歩いて。

公儲 (エンゲルブレヒトを揺つて)。肥大漢、はやく行つて泳いで来い。

エンゲルブレヒト(テトレューの腕にすがり、立ちながら眠る)。 承知しました。
アトレュー 戸を開けてくれ。(エンゲルブレヒトを負ひつれて行く)。こいつは重
いぞ。

公儲(テトレューに後から聲をかくる)。階段からあつこつちやいかんぞ。

第五景

ケティイ(再び入り来る)。

ケティイ ケラアマンはまだそこに居るんですね。

公儲 何處に?

ケティイ 眠つて居ますわ。

公儲(ケラアマンを揺ぶつて) どれもこれも眠がつてばかり居る。ケラアマン!

ケラアマン(夢中で)。 はう〜。

ケティイ あ〜! 此人は起さない方がいゝわ。眠らしてお置きなさい。

公儲 いつまでもこゝへ置くわけには行かないぢやないか。

ケティイ 何故いけないの。

公儲 何故いけないの? 此男は家へ行つた方がいゝんだ。まあ、此男を御

覽。ひどく疲れて居るらしい。

ケティイ えい。

公儲 日がな一日、夜までも引ばり廻されるんだ。足は鈍いが、ちつとも忌な
顔はしない男だ。可哀さうに! たつた一人てさへなかく、機嫌の取りに
くい主人が二十人もあつて、それが矢鱈に呼び立てるんだものなあ。一體
學生なんぞが、なぶり者にしやうと思ふんなら、こんな人間でない丈夫な

奴でもつかふがいゝんだ。こんな弱り切つてる人間が、學期毎に新らしい主人を取るのは可哀さうだ。

ケティイ ケラアマン！

ケラアマン はい〜。

ケティイ ケラアマン、家へ歸つてゆつくりお眠み。もう今日は用がないんだつて。それで好いて（公儲に向ひ）せう。一日家へ置いてやつてもいいてせう。

公儲 ケラアマン。おまへ何歳だね。

ケラアマン（眠さうに目をちくする）。

ケティイ おまへ何歳なの、ケラアマン。

ケラアマン 六十一でございます。

公儲 おまへ家族があるか。

ケティイ ケラアマン、何故返事をしないの。御話しよ。（ケラアマン黙然）。この

人の女房はいつも洗濯ものを取りに来ますわ、小さい娘つ子を二人連れて。公儲（隠袋から錢をとり出し）さあ、ケラアマン、これを汝の女房にやつておくれ。

ケラアマン（吃驚して、答へをなし得ず）。

公儲（陽気に笑ふ）。

ケラアマン、おまへは酒の事が少しは解るやうだな。いつ

れ僕がカアルスブルヒを支配する時が來たら、是非僕の所へ遣つておいて。僕はおまへを穴藏の番人にしてやらう、如何だ、忌ぢやあないかな。

ケラアマン 殿下。

ケティイ イルマに珈琲をこしらへてもらつて呑んでおいてな、ケラアマン、臺所へ行つて。（ケラアマン退場）。

公儲 窓をおあけ。(公儲は一方の窓に對して立ち、ケティイは他の窓の前に立つ。) 何といふ好い天氣だらう！◎木の芽の吹き出しさうな天氣だ。ケティイ、おまへにはお城で落會ふとしやう。十時か十一時に。而してあすこへ他の連中をのこして置いて、二人は二人つきりて外へ行かう。此前の日曜にやつた様に。

ケティイ どこへ行かませう。

公儲 ケイニヒストールへ行かう。

ケティイ ヴォルフスブルンネンへも行かませうか。

公儲 もつと遠くへ行かう。

ケティイ てなければ、オーデンワルドへ。

公儲 (ケティイを引よせて) 『オーデンワルドのあの一本は、枝もしげりて色か

へぬ』——僕もおまへもあの木は能く知つてるなあ。

ケティイ カアル・ハイントツ！(公儲はケティイに手をまき着く。兩人は躊躇ひながら接吻する。)

(間。)

公儲 あゝ眠くなつた。流石に疲れる。

ケティイ お眠みなさいな。

公儲 (飛上る様に身を起し) 眠るにはまだゆつくり時がある。ケティイ、この小さい安額を御覽。たつた二十五錢の額縁へ入つてる。(寫眞を讀む。) 『カアル・

ホーヘンローへ、一千八百四十八年より四十九年まで。伯爵ブレドゥ、一千八百五十三年』——この連中はみんなこゝに住んで居たんだな——この室に。

ケティイ(讀む)。一千八百六十年。

公儲 始終行つたり、來たりして居たんだ。(外の繪を見る)。間斷なしに變つて居たんだ。毎年新しい顔になつて。屹度此内には、可愛い若い娘を可愛がつてた人もあつたんだよ——こして。

ケティイ(公儲に凭れかゝる)。

公儲 此中の多數は忘れられてたんだ、いや、此中の多數は屹度死んでるんだ。而して今度はわれ／＼二人がこゝに居る事になつたんだ、ケティイ。

ケティイ ええ。

公儲 しかし兩人はいつ迄續くだらう。

ケティイ カアル・ハインツ——

公儲 僕たちのあとへはどんな人が來るだらう。幾人も——かはつて——かは

つて——

ケティイ そんな人の事なんか氣にしないがいわ。

公儲 うむ、そんな事はもう止さう。僕たちは若い、ケティイ。僕たちは自分の青春をたのしまう。彼奴らは僕を鎖で繋いで居た、あいつらは人生をいつまでも幸福にするあらゆるものを奪つてしまつた。——僕等は大いに笑はふ。ケティイ。僕たちは何か狂氣じみた事をしやう、今まで誰もやたつ事の無い狂氣じみた事をやらう。二人で一緒に世界中を旅してまはるんだ、——てなければ少なくとも巴里までいも。

ケティイ 巴里まで?

公儲 そんな事は何でもない。僕たちは一晚汽車へ乗つて行くと、翌朝は巴里へ着いて居るんだ。まあ考へて御覽!

ケティイ　まあ、好い事ね！

公儲　それから僕たちは買物に出かけるんだ。おまへは絹の着物だの、絹の靴下だの、鳥の羽のくつゝいた帽子なんか買ふんだね。さうして汝は目を丸くするんだ。それから僕たちはホテルへ行くんだ。まあ想像して御覽！

ケティイ　それから――

公儲　うむ、それから――僕たちは何時もよりもずつと陽気にするんだ。おまへは公妃殿下になるんだよ、だれよりもずつと綺麗な公妃殿下に。而して僕たちはまだ十分金があつて、其氣になれば、もつと遠くまで行くんだ。

ケティイ　あゝ、あなた口だけでせう！

公儲　口だけ？僕はほんとの氣なんだよ。われ／＼は大に生を味はなければならん、飽までも！何處までも！。それがいつまで続くものか！ルツツ！

ケティイ　何かあの人に用があるの。

第六景

ルツツ　（入来る）。殿下。

公儲　鐵道案内をもつて歩いて。汽車の時間を見なけりやならん。

ルツツ　畏まりました。（退場）。

ケティイ　（尙半ば疑はしげに）　あなた、ほんうに眞面目ぢやないでせう。

公儲　ルツツ。

ルツツ　（歸り來り）　殿下。

公儲　リユケルトに馬車をよこせといへ。僕は自分で馭者をやらう。馬車は昨夜かつたのがいゝよ。併し馬だけは新らしくしなけりやいかん。直に

だよ。

ルツツ 畏まりました。(退場)

ケテイイ あなた、何處へ行くの。

公儲 二人で散歩に行かう、ケテイイおまへも駁者臺へ乗つて、僕の側へ。

ケテイイ あなたの側へ!

公儲 ハイデルベルヒの街をまっ直に駆けさせるんだ。え、如何だ、此の考へは。僕たちは矢鱈に鞭をならすんだ、すると町の人間は目をさまして、窓から頭を出すだらう。なあ、ケテイイ、僕たち二人は相互のものだからなあ!

ケテイイ カアル・ハインツ!

公儲 さあ、駈けて行つて、白い着物をきておいて。二人はまるで變つた人間

になるんだ、今よりは千層倍も陽氣な、千層倍も狂氣じみた人間になるんだ。僕は二十年の間損をして居るのだから、その穴埋をしなければならぬ。(稍悲しげに) あ、何にしても容易な事ではない。

ケテイイ 何を云つていらつしやるの。

公儲 (再び機嫌を直し) いや、何でもない。早く行つておいて、ケテイイ。帽子を被つて着物をさかへておいて。それから二人で出かけやう。

ケテイイ ネットカアゲミュンドへですか?

公儲 而して明日の朝は巴里へ行かう。

ケテイイ (退場)

公儲 (ひとり残つて口笛を吹く) 何か用か?

ルツツ (再び入来る) 殿下!

公儲 (冷淡に) 別な靴をもつておいて、ルッツ、それからリンネルの着物を。

ルッツ 殿下——

公儲 うむ、何か用か。

ルッツ 閣下が御いてございます！

公儲 閣下とは誰の事か？

ルッツ 國務卿閣下でございます。

公儲 ちい、汝は頭が如何かして居るぞ！

ルッツ 國務卿ハウク閣下でございます。

公儲 ルッツ、汝は——汝は——

ルッツ (戸の方へ赴き開く) 國務卿ハウク閣下。(退場)

第七景

國務卿 (入り来る)。

國務卿 殿下——

公儲 (驚いて) あ——如何して——

國務卿 殿下、失禮ながら、私が突然——

公儲 國務卿、汝は旅行をして居るのか。

國務卿 殿下、私はカアルスブルヒから参りました。

公儲 なるほど——それ——

國務卿 殿下、かゝる早朝から推参致しました事は、御免を願はなければなりません。私は終夜の旅行を致して居りました。私は殿下の許へ悲しいも便

りをもつてまゐりましたので。

公儲（充奮して）何？

國務卿 殿下、左様に御驚きに御なりになつてはいけません。なに、然して

——極悪い——と申すほどの事にもござりませんので。

公儲 何？

國務卿 殿下も御承知の筈でございますが、大公殿下には、數月前から健康が
あすぐれになりませんので、餘程心痛致して居りました——それにその

公儲 それにその——

國務卿 今度の御發病は、昨朝の丁度たゞ今頃から初まりましたので。中風の
御發作なのでござります。

公儲（頭をたしきながら）あゝ左様——あゝ左様——なるほど。まあ、かけるがい

ゝ、國務卿。（扉の方へゆき、「ルツッ！」と呼ぶ。）

ルツッ 殿下。

公儲 何か用があるのか。（茫然として。）ユットナア博士に此處へ来るやうにと
云つてくれ。いや、止した方がよからう。——いや、来てもらはふ。

（寂寞たる間。）

國務卿 大公殿下の御病氣は、餘程御重體でござります。あの御病狀は餘程長
くつゞくだらうと存じられます。多分殿下の御生存の中はあのまゝに續く
だらうと存じられます。

公儲（尙茫然として）。なる程、いかにも。

國務卿 此分で見ますると、遺憾ながら、大公殿下には、あのまゝ、政治を御執

りになる事は御出来になりますまいと存じられます。

公儲 (愁然として語なし) あい。

國務卿 御病體は、あの儘で幾年もつゞく事であらうと存じられます。殿下。

公儲 幾年も！

國務卿 これは侍醫の診断でござります。

(長き間)。

公儲 國務卿、汝は何のためにこゝへ来たのか。いや、如何いふわけでこゝへ来たのかといふのだ。

國務卿 殿下が御若年であらせらるゝがため、大公殿下には今日まで、全然國政に關する事を殿下に御任せには相成りませんでした。て、かゝる悲しむべき、意外な事件が出來致しましたる以上は、太だ御氣の毒の次

第ではござりますが、是非殿下に御政務を見ていたゞきたいもので。

公儲 僕に――

國務卿 何を置いても攝政の必要がござります。そこで――

公儲 (不機嫌にて) 僕は歸らなければならないといふのか。

國務卿 殿下――

公儲 カアルスブルヒへ歸らなければならんといふのか。

國務卿 殿下の御諒察を願はしう存じまするのは――

公儲 汝は僕にどんな事を願つてるか、分つて居るのか。

國務卿 私が殿下に御願ひ申しまするのは――

公儲 汝は僕をしつかりと縛りつけやうといふのだらう。僕は二十年間といふもの、その病大公にしばらくつけられて、呼吸さへ碌々つく事は出來なかつ

たのだ、おまへはまた僕をそこへ縛りつけやうといふのだらう。——（腹立
しげに、扉の方へ動き）ルツツ！博士を早く呼んで来い。博士を起すがいい。直
に！博士は何故来ないんだ？（國務卿に）——僕たちは此以上議論をするの
は止さう。國務卿、言を費すのは止さう。一言でも無益な事だ。

國務卿 殿下——

公儲 言ふまでもなく、僕も叔父君の御病氣については深く心配して居るが、
しかしそれはそれだ。僕は宮中に在つては、いつでもまるで無關係の人間
であつたのだ、單に無關係の人間に過ぎなかつたのだ。僕は叔父君を知つ
て居るか。僕は國務卿たる汝を知つて居るか。僕は宮中の何人でも知つて
居るか。なるほど僕は近侍の者は知つて居る、舍人たちは知つて居る。お
まへたちは舍人と一緒に僕を散歩に出した事はある。彼等と一緒に僕を遊

ばせてくれた事はある！

國務卿 殿下——

公儲 が、とうとう僕は自由な身になつた。おまへ方は僕をハイデルベルヒへ
よこした。併しそれは僕を人間にするためではなかつたのだ。いやもつと
僕を推籠めて置かうためであつたのだ。が、僕はこゝへ来て目を開かれた。
見る事を教へられた最初の日から目が開いた。この人は『如何して』と
か、『何故に』とかといふ問ひを出しはしない。たゞ兩手を開いて僕を歓迎
してくれたのだ——

國務卿 殿下——

公儲 僕は歩く事も、しゃべる事も教へられなかつた年のいかな小供であつ
たのだ。僕は人形のように、あつちへ轉んだり、こつちへ轉んだりして居た

年のいかない小供であつたのだ。いや、笑ふとも出来ない小供であつたのだ。ところがハイデルベルヒの人たちは、笑ひかたを僕に教へてくれた。國務卿(間)。殿下は南獨逸の大學で一年間を御費やしになる事を、飽まで必要などと御考へになつておいてになる。が、それが果して正しいか如何か。それについて自説を申し上げます事は、私に取つて相應はしからん事と存じます。

公儲 國務卿にはそれが適當な事ではないといふのか？ 僕は汝の良心がその爲めに責を負ふとにならないのを喜んで居る。汝は大學で一年と云つたね？ 一年は十二ヶ月ある。ところが僕はハイデルベルヒには、まだ四ヶ月しか居ない。僕は残りの八ヶ月を平氣で棄て、しまはふといふ氣はない。おまへがたは、自分たちが適當と思ふだけ、僕の青春を奪ひ去つてしまつた。僕

はわづかに残つて居るだけのものでも、是非取つて置かなければならないのだ！

國務卿 殿下、ては殿下は、カアルスブルヒへは御歸りにならんと、御決心遊ばしたのでござりますか。

公儲 左様だ。

(長き間)。

國務卿 私は進退谷まりました。殿下は大公爵家の後継者として、大公殿下の御繼嗣とならせらるゝ爲めに、呼迎へられて居られるのでござります。而してかゝる権利をお有ちになりなするのは、殿下御一人でござります。それ故今日の如き一大事の場合には、是非攝政の職を御引受け遊ばす義務があまり遊ばしますので——

公儲 併し、若し僕が――

國務卿 殿下、左様な事を仰せられましては、如何なる結果が起つてまゐりまするか、私は申上ぐるに忍びません。

公儲 僕は自分の考へを明白にする意志も、自由も、特権ももつて居ないのか？ それでは僕はまるで罪人だ？

國務卿 併し殿下、それは多少だれでも共通の運命でございます。

公儲 そんな事はない、汝は嘘を云つてるのだ。國務卿、僕は何の目的もなくこゝへ来たのではない。僕は自分の周囲を見た。よいか。こゝでは何な人間でも、自分に相當な事業の附隨して生なるものをもつて居る。而して其人たちの既往には自分の少年時代なるものをもつて居る。彼等の中たつた一人でも曾て孤獨を感じた事はない。その人の學校時代にも、現在にも、

國務卿 殿下――

將來にも、そんな事は決してない！ 彼等は人間となるために教育され、彼等は自己の生を盡し、彼等は人間として存在する。それであるのに僕だけは、既往よりも一層嚴重に拘禁されなければならないのか――

公儲 (おだやかに) 病室へ入つて。而して終生悲惨な境遇で居ながら、死ぬほど

僕を苦めやうといふ人の側へ呼び寄せられて。(間。おだやかに哀訴する如く、國務卿の方へ進みしが、やがて自から制して) 國務卿、どうか此苦境から脱する事の出

来る途をもとめてもらひたいものだ。國務卿、どうか僕をこゝへ置いてもらひたいものだ。

國務卿 殿下――

公儲 國務卿、僕に時を與へてくれ。たつた一年、いや數ヶ月だけでもいい。

さうしたら僕は屹度かへる、僕は汝と約束する。國務卿、僕は——僕は——
汝は何とか途をもとめてくれる事が出来るだらう、え、出来ないか？た
しかに何とかしてくれる事が出来る筈だ。

國務卿 私には致しかたがござりません。

公儲 (須臾立ちたるまゝにて、茫然と見詰む。やがて臂かけ椅子の方へ起き、床を見つめ
て腰うちかくる)。

(長き間)。

國務卿 (極めてしづかに、一語々々に力を入れて) わたくしは殿下を強ゆるわけにはま
りません。いや誰にしても左様はまゐりません。併し殿下は殿下の前途
にどんな事があるか御知りにならなければなりません。殿下を待受けて居
りまする事業と申しますものは決してつまらん事ではござりません。遠

くから眺めて居る人々には、高位の生活は、昇る旭陽の無窮の光りの中
にある様にも見えませぬ、併しその實、場合によつては最も下層の人間に
も劣らない程の努力をしなければならぬものでござります。てござりま
すから、殿下は其地位を避けて幸福であつた過去の月日を保留しやうとな
さらうとも——私は御止め申す譯にはまゐりませぬ。大公と申すものは、
その玉座の上に寂しき生活を送るべきものでござります。一條の水は、あ
らゆる他の人間から、いや自己の家柄や位の徳によつて、最も近く玉座に
接し得る人々から、隔てゝ居るのでござります。大公は常に孤獨であ
いてならねばならぬのでござります。それが即ち大公の事業の至難な處
で、其権力も亦そこに存するのでござります。(長き間の後) 殿下！
公儲 (夢より醒めし如く立上り) 何？(立上りしが力盡きてよろめく) 成程、おまへ

の云ふ通りであらう。僕は——行かう。

國務卿 殿下、フランクフルトへの急行列車は、もう一時間で立ちます。では、私は停車場に於きまして、殿下を御待受け申上げたいと存じますが。

公儲(たい首肯)。

國務卿(退場)。

公儲(椅子に崩折れ、両手にて顔を覆ふ)。

第八景

博士(巻のまゝにて入来る)。カアルスブルヒへ！ 殿下はカアルスブルヒへ——

御出でにならなかりやならんのでございますか。

公儲(聲を上げて嗚咽し、博士にもたれかゝる)。

博士 カアル・ハイッツ。ねえ。まあ、能く考へて御覧なさい、こんな事は——

こんな事は何でも無い、詰らん事だ。世の中の事といふものは毎日かはるものだ。老大公はまた直に快くおなりになるかも知れん。三週間か四週間もすると、あなたはまた直に御歸りになれる。大公殿下は今まで御病氣の事はなかつたのだ、六十五にもおなりになつて鐵の様な身體をして居られたのだ。併し誰だつて時によると病氣をする事がある。而してその時には是非誰か其代理をしなければならぬ。そんな事は日を見るよりも明かであるのだ。兎に角たつた三週間の事です。

公儲(よわり果て、倒るゝばかり)。あゝ。博士！

博士(自ら欺くために憤然として) 諺にいふ『動ともすると打垂れる頭』とは其事だ。

私は是迄、其の爲にどの位困らせられたか知れない。何といふ弱い氣象で

す！ その氣象が何事をも、極愉快なものか、極情ないものに見せるのだ。それがといふと、あなたは今迄眞面目に人生と闘つた事がないからなのだ。

公儲ではおまへは——

博士ね、たつた十四日の事だ。さうすればあなたは又還つて來られるのだ。わたしも一緒に行きませう。

公儲 いけない、博士。おまへは此處に居るがよい。少くともおまへは養生をして、根本的に病氣を直してしまふ必要がある。おまへは十分攝生をしななければならぬ。博士、おまへはそれを僕に約束しておくれ。

博士(目に手をあてる。博士は今や失望に陥る)。

公儲(博士を慰める)。「おまへは僕の室と、それから側にくつゝいて居る露臺を使

ふがよい。さうすると、終日日向ぼつこが出来るから。それに他の連中もやつて來て、おまへを尋ねるだらう。だからおまへは毎日人に逢つて、ちつとも倦きる様な事はありはしないよ。

博士 ふむ！

公儲 それに若しおまへが其方がいゝと思ふなら、おまへの世話をするために、ルツツをこゝへ残して行つてもいいよ。

博士(笑ふ) いゝえ、それには及びません。が、わたしは心底有難いと思ひます。

公儲(笑ふ) それには及びない？

博士(大儀さうに立上る)。

公儲(博士を支へんとして前に飛び出す)。

博士 打棄つて置いて下さい。わたしは大丈夫だ。それよりもあなたは急ぎにならなければいけん。わたしどもは別れを惜むためにむだに時を費してはなりません。たつた三週間位の事に、鹿つめらしい暇乞などをされるのは笑ふべき事だ、カアル・ハイנטツ。——が、あなたも御存知の通り、われわれは將來を見通すことは出来ん、だから——われわれは八年の間始終一緒に居りましたなあ。

公儲 (悲しげに首肯)。

博士 如何か分りませんが——或ひはわれわれ——あなたとわたしは——生涯の中に尙一度、御話をする機会がないかも知れません。だからわたしは今申上げて置きたい。カアル・ハイנטツ、いつまでも若くて居て下さい。わたしのあなたに御願ひするのは、それだけです。今の通り、若くて居て下さ

い。而してあなたを圍繞いて居る連中が、あなたの氣象を變化させやうと試みても(萬事さういふ風に傾けてせうか)、奮然彼等の勧めに反対なさい。カアル・ハイנטツ、あなたは若い心をもつた人間としていつまでも居て下さい。あなたが今思つて居る様に、今日のハイデルベルヒや、わたしの事を思はない日が来るかも知れん。いや、あなたは多分輕蔑の感情、いや忿怒の感情をもつて、過去を振り返つて見る事になるかも知れない。その時あなたは御自分で如斯仰有るだらう。『わしが其中へ投り込まれた連中に對して、あんなに親しくしなければよかつた。わしはあんな風でなく、もつと權威を保つて居べきであつた』と。而して、それが眞實であるとあなたに云つて聞かせる人があるてせう。此數ヶ月間が、あなたの生涯に見苦しい不調和を示したといつて聞かせる人があるてせう。併しそんな事を御信じになつ

てはいけません。(博士は公儲の手を固く握り、退場せんとして、再びまほりを見、默然として公儲を抱きしめ、やがてしづかに出て去る)。

公儲(ひとり残る。彼はたゞおのが前の方のみ打尻りつゝ椅子に凭く。長き時の後、彼は上の方を見、さて何物かを求むるが如く、周囲を見る)。博士!

ルツ(旅行鞆を持ち来り) 若し殿下が御持ち遊ばしたいものを、この中へ御入れ下さいますれば――

公儲よろし。

ルツ わたくしはあちらで行方を荷造り致したいとぞんじます。

公儲(答へず)。

ルツ(命令を待ち居りしが、やがて手持不沙汰に退場す)。

公儲(太息を吐く)。

第九景

ケティイ(白き衣服をつけ、充奮していそぎ入来る)。カアルスブルヒへ行くんですつて

? 如何して行くの?

公儲(しひて笑はんとす)。うむ、ケティイ、今日はもう皆なだめになつてしまつた。情ない話ぢやないか。こんなに好い天気だつたのになあ。

ケティイ えい、ほんとうに情ないわ。

(これよりしばらくの間、二人は互ひに慰めあはんとし、訣別の深き哀みを示すまじとつとむ。彼等はしづかに、何事もなげに話し合ふ。されど舞臺は全く悲哀の印象を残さざるべからず)。

公儲(しひて戯談をいはんとす) ネットカアゲミュンドは逃げて行きはしやあしまい。

其中二人で——一緒に馬車で出かけやう。

ケティイ さあ、わたしも手傳しませう。さあ、こつちへ下さい——これは如何なさるの。御本に——それから——

公儲 おまへは白い着物を着たね!

ケティイ えい、こんな事なんかしなくたつて好かつたんだわ。わたし又脱ぎますわ。

公儲 ふむ!

ケティイ あなた還つていらつしやる事になつたら、わたしに葉書で知らして下さいよ。わたし停車場へ迎へに行きますわ。

公儲 あゝ何て馬鹿な話だ! 人間の頭脳へは、何といふ理由もなしに、馬鹿な考へが浮んで来るものだ。僕はもう推こめて置かれる様な小供ではない。

彼奴等が僕をおさへて置かうとでもしたら——彼奴等は屹度するだらう——僕はもう主人だ、彼奴等は僕の自由をうばふ事は出来ない。彼奴等にはそんな事が出来るものか。ケティイ、それを僕にくれ。われ／＼は急がなけりやならない。もう何時だ。(時計を見る)。僕は何をもつて行かうか知ら。(周囲を見る)。あゝ。何にも持つて行かない! たゞわづかの間の忌な旅だ。

ケティイ、それを閉めてしまつてくれ。

ケティイ (涙のために語を出し得ず)。

公儲 (間。やがて着物をしらべて) さうだ、さうだ、学生帽では。(学生帽を取去つて)。僕の帽子は何處にある。

ケティイ (戸棚より帽子を取出す)。

公儲 (笑ふ) ひどい塵埃だ。僕は長いこと、こんなものを頭へのつけた事はな